



## 序 文

堰の上遺跡発掘調査報告書をこの度矢吹町文化財調査報告書として刊行することになりました。

遺跡は矢吹町の西側大信村との境界に位置し、東北自動車道矢吹インター西側の山林32haを東京都泰斗建設㈱より工業団地分譲地造成の計画があり調査しました。

調査に当っては、日本考古学協会会員国士館大学文学部戸田有二先生に依頼し、調査員・多くの地元作業従事者の献策的なご協力により事業を遂行することができました。

今回の調査では、縄文式土器及び土坑群並びに溝跡が発見されました。

遺跡は、発見された遺構や石器類及び縄文式土器の特徴から、縄文時代から中世のものだと推察されます。

今後も町として文化財について一層のご理解とご協力をお願いするものであります。

最後に担当者の戸田先生、特に執筆に御協力をいただいた矢島俊雄先生、調査に御協力くださいました調査員、地元調査協力者、更に関係者の皆さまに感謝申し上げますと共に、この報告書が今後の調査、研究にご活用いただければ幸いに存じます。

平成 3 年 3 月

矢吹町教育委員会

教育長 坂本 迪郎

## 凡 例

1. 本報告書は、矢吹町塚の上遺跡発掘報告書である。
2. 本調査は、工業団地分譲地造成に係り緊急調査を実施した。
3. 発掘調査は、矢吹町教育委員会が実施した。  
発掘担当には、戸田有二が当たった。
4. 本報告書作成にあたり、その整理作業は、戸田有二、高井剛、植田和子、戸田万季が、また執筆、編集にあたっては、戸田有二、矢島俊雄が行なった。
5. 本報告書の執筆、編集の責任は担当者の戸田有二にあり、発行の責任は、矢吹町教育委員会が負うものである。
6. 発掘調査によって得た資料および記録は、すべて矢吹町教育委員会が保管している。



# 目 次

序 文	
凡 例	
調 査 要 項	
目 次	
I 歴史的環境と遺跡の位置	2
1. 歴 史 的 環 境	2
2. 遺 跡 の 位 置	4
II 遺 構 と 遺 物	4
1. 遺 構 (A地区)	6
2. 遺 構 (B地区)	8
3. 出 土 遺 物	10
III ま と め	27
1. 出 土 土 器 に つ い て	27
2. 出 土 石 器 に つ い て	27
3. 土 坑 に つ い て	28
4. B地区1号土坑について	29

## 插 圖 目 次

Fig. 1、	矢吹町遺跡分布図	1
“ 2、	堰ノ上遺跡地形図	5
“ 3、	堰ノ上遺跡A地区全体図	30
“ 4、	堰ノ上A地区2号土坑実測図	31
“ 5、	“ 1号 “	32
“ 6、	“ 3号 “	32
“ 7、	“ 4号 “	33
“ 8、	“ 6号 “	34
“ 9、	“ 8号 “	34
“ 10、	“ 7号 “	35
“ 11、	“ 9号 “	36
“ 12、	“ 10号 “	37
“ 13、	“ 11号 “	38
“ 14、	“ 12号 “	38
“ 15、	“ 13号 “	39
“ 16、	“ 16号 “	39
“ 17、	“ 15号 “	39
“ 18、	“ 14号 “	39
“ 19、	堰ノ上B地区全体図	40
“ 20、	“ 1号土坑実測図	41
“ 21、	“ 33号 “	42
“ 22、	“ 7・8号 “	42
“ 23、	“ 15号 “	43
“ 24、	“ 11号 “	43
“ 25、	“ 10号 “	43
“ 26、	“ 13号 “	44
“ 27、	“ 14号 “	45
“ 28、	“ 12号 “	45
“ 29、	“ 5号 “	46
“ 30、	“ 6・22号 “	47
“ 31、	“ 21号 “	48
“ 32、	“ 20号 “	48
“ 33、	“ 23号 “	48
“ 34、	“ 25号 “	48
“ 35、	“ 24号 “	49

Fig. 36、	堰ノ上B地区26号土坑実測図	-----	49
” 37、	” 27号 ”	-----	50
” 38、	” 28号 ”	-----	50
” 39、	” 30号 ”	-----	50
” 40、	” 29号 ”	-----	50
” 41、	” 31号 ”	-----	50
” 42、	” 32号 ”	-----	50
” 43、	堰ノ上A地区出土石器実測図	-----	51
” 44、	” A・B地区 ”	-----	52
” 45、	” A地区出土土器実測図①	-----	53
” 46、	” ” ②	-----	54
” 47、	” ” ③	-----	55
” 48、	” ” ④	-----	56
” 49、	” B地区出土土器及び1号土坑出土土器実測図	-----	57

## 図 版 目 次

図版 1、	(上) 堰ノ上遺跡A地区全景東側より	-----	59
	(下) 堰ノ上遺跡A地区全景		
” 2、	(上) 堰ノ上遺跡A地区東側全景	-----	60
	(下) 堰ノ上遺跡A地区全景		
” 3、	(上) 堰ノ上遺跡A地区全景東側より	-----	61
	(下) 堰ノ上遺跡A地区全景		
” 4、	(上) 堰ノ上遺跡A地区1・2・3号土坑	-----	62
	(下) 堰ノ上遺跡A地区3・1号土坑		
” 5、	(上) 堰ノ上遺跡A地区3号土坑	-----	63
	(下) ” 4号土坑		
” 6、	(上) ” 5号土坑	-----	64
	(下) ” 6号土坑		
” 7、	(上) ” ”	-----	65
	(下) ” 7号土坑		
” 8、	(上) ” 8・9号土坑	-----	66
	(下) ” 10号土坑		
” 9、	(上) ” 11号土坑	-----	67
	(下) ” 13号土坑		
” 10、	(上) ” 16号土坑	-----	68
	(下) ” 溝跡断面		

図版11、(上)	堰ノ上遺跡A地区溝跡断面	-----	69
	(下)	溝跡中央部断面	
" 12、(上)	溝跡断面	-----	70
	(下)	"	
" 13、(上)	堰ノ上B地区2号土坑	-----	71
	(下)	1号土坑	
" 14、(上)	1号土坑	-----	72
	(下)	6号土坑	
" 15、(上)	8・7号土坑	-----	73
	(下)	8号土坑	
" 16、(上)	9号土坑	-----	74
	(下)	10号土坑	
" 17、(上)	11号土坑	-----	75
	(下)	8号土坑	
" 18、(上)	13号土坑	-----	76
	(下)	14号土坑	
" 19、(上)	15号土坑	-----	77
	(下)	17号土坑	
" 20、(上)	18号土坑	-----	78
	(下)	19号土坑	
" 21、(上)	20号土坑	-----	79
	(下)	21号土坑	
" 22、(上)	22号土坑	-----	80
	(下)	23号土坑	
" 23、(上)	24号土坑	-----	81
	(下)	25号土坑	
" 24、(上)	27号土坑	-----	82
	(下)	28号土坑	
" 25、(上)	28号土坑	-----	83
	(下)	29号土坑	
" 26、(上)	30号土坑	-----	84
	(下)	31号土坑	
" 27、(上)	33号土坑	-----	85
	(下)	12・33号土坑	
" 28、	堰ノ上遺跡A地区出土石器	-----	86
" 29、	土器	-----	87
" 30、	"	-----	88
" 31、	堰ノ上遺跡B地区出土土器	-----	89



Fig. 1 矢吹町遺跡分布図

# I 歴史的環境と遺跡の位置

## 1. 歴史的環境

大化前代の東北地方南部（福島県）は信夫国造・阿尺国造・石背国造・白河国造・浄田国造・染羽国造・道尻岐閉国造・石城国造・道奥菊多国造・道口岐閉国造など、10前後の国造支配によって統治されていたといわれており、同じ東北地方でも北部と比較して大化前代より中央の大和朝廷との交流が盛んであったようである。大化の改新による国郡制の設置によりこういった大化前代の国造支配圏はそれぞれ陸奥国の郡としての行政区画に改められて行くものであった。大化の改新後律令制社会を形成し、新しい技術の発展など目ざましく、特に新開地の開拓は東国をその基盤として「道奥国」に多く向けられた。こういった中で大化の改新より73年後養老2年5月2日には、

乙未。郡。越前国「之」羽咋。能登。鳳至。采洲四郡。磐前。龍谷国「郡」  
上総国「之」平群。安房。朝承。長狭四郡。置。安房国。郡。陸奥国「之」  
石城。磐葉。行方。宇太。日理。常陸国之菊多六郡。置。石城国「郡」白河。  
石背。会津。安積。信夫。五郡。置。石背国。郡。常陸国多珂郡之新田百  
十烟。名曰。菊多郡。属。石城国。焉。

とあり、能登国、安房国などとともにこの年陸奥国南部太平洋側の石城・磐葉・行方・宇太(多)・日理の五郡と常陸国北部の多珂郡より201烟を割いて菊多郡とし合計6郡から「石城国」を、そして同じく陸奥国南部内陸部より白河・石背・会津・信夫の五郡を分離させ「石背国」が、それぞれ独立した行政区画の国となったことを示すものである。しかし神亀5年4月11日には、

丁丑。陸奥国置。新。置。白河軍団。又。置。丹波軍団。為。玉作軍団。並。若  
之。

といった記事がみられる。この記事はこの年新たに白河軍団を設置し丹波軍団を改めて玉作軍団としたという内容のものであるが、ここで「陸奥国云々白河軍団」とあり、養老二年に陸奥国より独立し、白河郡始め五郡として石背国が設置され、10年後の神亀5年にすでに白河軍団は陸奥国とある。つまり設置された石背国は10年以内でまたもとの陸奥国に属すわけである。さらにこれを決定的にうらづける記事がこの40年後の神護景雲3年の記事に見られる。この記事は陸奥国内の人達に姓を賜ったことを記載したものであるが、「陸奥国白河郡人外正七位上丈部子老以下、磐葉郡人正六位上丈部賀例努、安積郡人外徒七位下丈部直總足、信夫郡人外正六位丈部大庭、会津郡人外正八位下丈部庭虫、磐城郡人外正六位上丈部山際、日理郡人下徒七位上宗何部池守、白河郡人外正七位下鞆大伴郡継人、行方郡人正六位下大伴部三田、宇多郡人外正六位下吉弥侯部文知」など、旧石城国では菊多郡を除く石城・磐葉・宇多・行方・日理の五郡と旧石背国に属した白河・磐葉・会津・安積・信夫五郡はすべて陸奥国となっており、この時期には石背の国のみではなく、岩城の国も陸奥国の行政区画にくみ入れられていたことがわかる。古代石城国が養老2年より後、各郡が正史で陸奥国の行政区画に組み込まれた形で記載された最も古いものがこの神護景雲3年3月13日の記事であるので、はっきりいつ陸奥国になったのかは明確ではないが、石背国については少なく

でも神亀5年以前に陸奥国となっていたことは「新置白河軍団」云々の記事で推測できる。

このように古代白河郡を含めたこの地域は陸奥国に属していたものであるが、八世紀前半代の約10年程は石背国となって機能した時代もあった。また古代白河郡の設置は大化の改新後もなく陸奥国の設置に伴って東国と境した最南端に置かれたものである。もちろん大化前代の白河国造の支配圏がそのまま郡としての行政区画に組み込まれるものであった。その範囲は現在の東は古殿町、西は西郷村、南が茨城県久慈郡大子町、北は平田村にわたる。当時としては陸奥国最大規模を誇る大郡であり、現在の18市町村を含めた広い地域にわたるものであった。和名抄によるならば当時の白河郡には小野・白川・大村・丹波・松田・入野・鹿田・石川・長田・松田・小野・藤田・屋代・常世・高野。依上の16郷が見られる。また前述の白河軍団であるが神亀5年4月11日(728)の記事は陸奥国における軍団の記事としては最も古い時代のものである。軍団は令制によって全国に設置された古代の軍隊であるが、大団(千人以上)、中団(六百人以上)、小団(五百人以下)からなり、これらの軍団はそれぞれの国に於ける三郡またはそれに近い数の郡、一単位として組織されるものである。また軍団の兵士は戸の正丁三人に一人の割合で出したものである。養老3年(719)の軍団の制では大団に大毅一人、小毅二人、中団で大毅、小毅各一人、小団で毅一人とそれぞれ定められているが、これらには地方豪族が任についた。また軍団の兵士は、その勤務が団別に十番に分けられ交替で軍団に十日づつ出勤するという形をとったものである。白河軍団が設置されるのは神亀5年(728)のことであるが、その後の白河軍団に関連した記事では弘仁6年(815)8月23日の大政官符に次の様な記事が見られる。

分番令 城塞・事

兵士六千人 舊置及新置計

舊置二千人 兵名

今請二加四千人 行白河軍団 千八百人 小田原軍団 千八百人

が、この記事である。これによると、弘仁年間陸奥国内には名取団・玉造団・白河団・行方団・安積団・小田団が存在し、いずれも兵士千名以上をかかえる大団であったことがうかがえる。ちなみにこのうちの安積軍団・行方軍団・白河軍団は現在の福島県内に設置されたものである。またこの段階では県内の軍団は三カ所であるが、その後仁明天皇承和15年5月13日の記事から、新に磐城軍団の設置があったことをうかがえる。この様に白河郡には神亀5年に白河軍団が設置されるが、白河郡内のどこに位置していたのか現在その推定は明瞭でない。

一方矢吹町内に於ける遺跡の分布は確認されているもので約90カ所以上あり、その他確認されていないものを含めると130カ所以上に及ぶものと考えられる。古代白河郡内でのこの地域は最北端に位置し岩瀬郡と隣接する場所に位置づけられ、南側は古代白河郡衙の設置された泉崎村とも接する。現在の矢吹町は町域の西側を東北自動車道とJR東北線が通過し町域は東側を北流する阿武隈川で、南側は泉崎村から蛇行して東流し、阿武隈川に注ぐ泉川で、西は隈戸川でそれぞれ区画されている。町内の遺跡の分布は東側で北流する阿武隈川西岸の地域と、南側で東流する泉川北岸及び西

側を北流する隈戸川の西岸地域のほぼ三カ所に集中して確認されている。これらの分布する遺跡のうち阿武隈川西岸の三城目陣ヶ岡遺跡及び成田遺跡は旧石器の標式となる成田型刃器の出土する遺跡としても有名である。また古墳時代では泉崎の南岸の地域で古墳時代前期の円墳が多く築造されている。一方歴史時代の遺跡としては特に生産遺跡として古代白河郡衙及び古代石背国府の付属寺院跡に屋瓦を供給したカニ沢瓦窯跡もある。こういった歴史地理的環境の中での堰の上遺跡の位置は隈戸川西岸に集中して営まれた遺跡群の一つである。

## 2. 遺跡の位置

堰ノ上遺跡は福島県西白河郡矢吹町字堰の上 259-20、303-1、304-1、304-2 地内に位置する縄文時代早期及び前期を中心とした遺跡である。矢吹町は北側で鏡石町と西側で隈戸川を境に大信村と、南側で泉崎村と東側で阿武隈川を境に玉川村とそれぞれ接し福島県では中通り地方の南部に位置する。町内は南が泉川、東は阿武隈川、西は隈戸川にそれぞれ囲まれた立地条件にあり遺跡はこれらの河川の沿岸に集中する。堰の上遺跡はこれらの河川の沿岸に集中する遺跡のうち、町内西部を東流する隈戸川北岸に営まれたものである。この遺跡に隣接して周辺にはその年代は明瞭でないが三尊来迎浮彫をもつ山王供養塔、同じく阿弥陀湯供養塔、昭和45年度東北自動車道建設に伴って発掘調査の実施された狐石A遺跡（奈良・平安時代の集落跡）、同じく奈良・平安時代の集落跡である井戸尻遺跡、土師器散布地である笹目平遺跡、縄文時代後期の狐石B遺跡、中世城郭では大和久城跡・笹目平館跡などがある。堰の上遺跡は大和久城跡の西側に位置する。遺跡は丘陵上に営まれたものであるが、この丘陵は、標高320m台のほぼ東西方向に発達した低丘陵である。丘陵の上面はいくぶん平味をおび、根根状に北西方向から南東方向に発達する。遺跡はこの根根上に営まれたものである。

## II 遺構と遺跡

標高320m程の尾根上に、遺構の確認を目的とし南東方向から北西方向に向けて1本のトレンチとさらにこれに交叉させた南西方向から北東方向にかけてのトレンチを合計6本設定した。トレンチの中はいずれも2mである。試掘調査の結果この尾根上での遺構の検出は南東の第1トレンチ内で土坑及び溝跡が確認され、この場所では土器及び石器の散布量が比較的多かった。さらに北西方向に於ける10・11・12・13トレンチ内でも土坑及び土器・石器の出土が確認された。以上の様にこの尾根上に於けるトレンチ調査の結果、遺構の存在が確認できたのは尾根の南東地区と北西地区であった。したがって発掘調査はこの地区を対象として実施した。このうち南東地区をA地区とし、北西地区をB地区とした。

平面图 1:1000

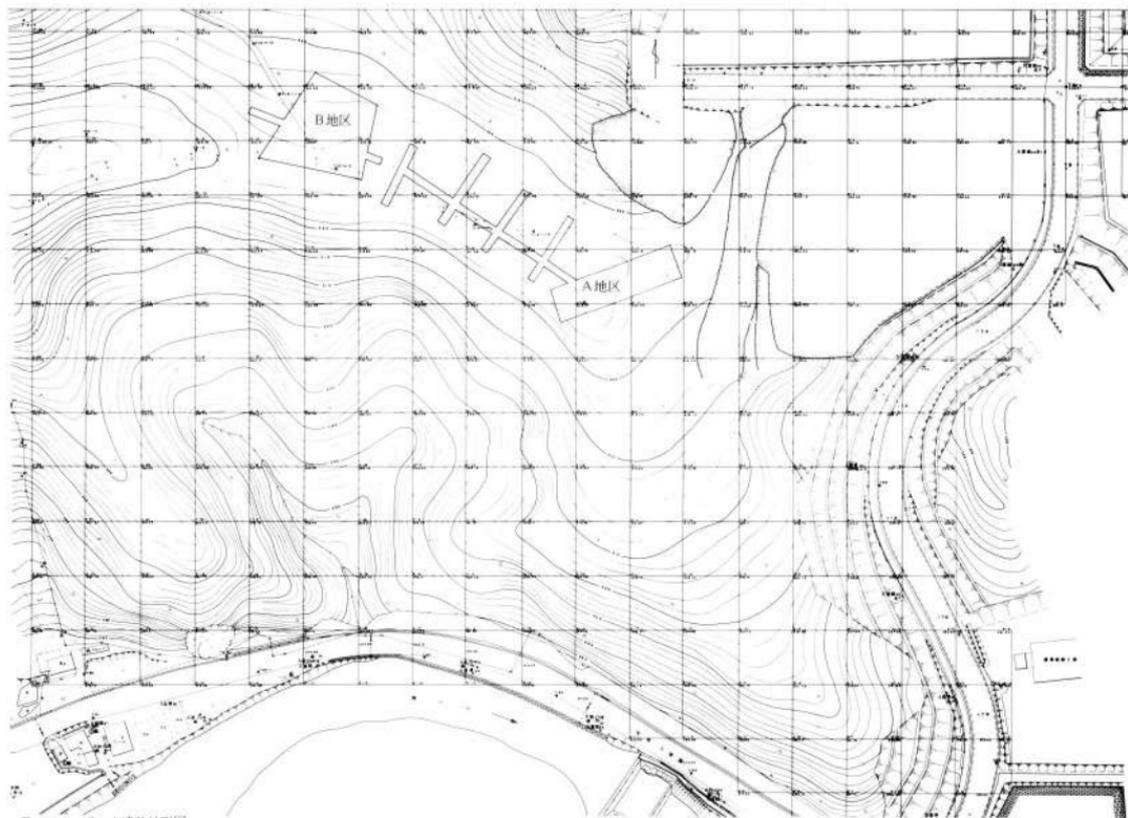


Fig. 2 暖ノ上遺跡地形図

## 1、遺 構 A地区

尾根上の南東端に位置し、巾約20m×100mの区域である。この地区では16基の土坑と溝跡1条が確認された。

### 1号土坑 (Fig. 5)

長径1.05m×短径0.85m、深さ約30cmの楕円形に近い平面をもつ土坑である。

### 2号土坑 (Fig. 4)

1号土坑の北側に位置する。長径約3.35m、短径1.9m、深さ約1mの長方形に近い平面をもつた土坑である。側壁は上面で外傾するが下部に行くにしたがって直立する。また上面は不定形に近い平面をもつが底面はやや長方形に近い平面をもつ。床面はロームそのものでかたい。床面には中央よりやや右寄りに径18cm、深さ20cmのビット及び、中央より左寄りに径25cm、深さ30cmのビット、さらに北側壁に、長径35cm、短径20cm、深さ25cmのビットがそれぞれ穿たれている。内部の埋積土層は黒色土一層である。

### 3号土坑 (Fig. 6)

1号土坑の東側に位置する。長径2.7m、短径1.8m、深さ0.6mの楕円形に近い平面をもつた土坑である。

### 4号土坑 (Fig. 7)

2号土坑の北側に位置する。長径3m×短径1.8m、深さ1.2mの楕円形に近い平面の土坑である。側壁の立ちあがりは上面がわずかに外傾し、下部で直立きみとなる。床面はほぼ平で、中央より右に寄った場所で径20cm、深さ25cmのビットが2個穿たれている。

### 5号土坑

最南端に位置する。長径2.1m、短径1.8m、深さ0.8mの円形に近い平面をもつた土坑である。

### 6号土坑 (Fig. 8)

7号土坑の南側に位置する。長径約2.2m×短径2m、深さ約0.5mの円形に近い土坑である。

### 7号土坑 (Fig. 10)

6号土坑の北側に位置する。長径3.7m×短径約2.7m、深さ約30cmの楕円形に近い不定形土坑である。床面はロームそのものでほぼ平である。床面には長径27cm×短径38cm、深さ約10cm、長径25cm×短径20cm、深さ10cm、長径50cm×短径43cm、深さ20cmのビットが合計3個認められた。

#### 8号土坑 (Fig. 9)

9号土坑の南側に位置する。長径3m×短径1.85m、深さ45cmの楕円形に近い平面の土坑である。

#### 9号土坑 (Fig. 11)

8号土坑の北側に位置する。長径4.35×短径3.25m、深さ約35cmを計る。土坑というよりむしろ竪穴状遺構に近いものである。床面はロームそのものではほぼ平である。側壁は直立せず外傾して立ちあがる。床面にはピットらしき痕跡はない。埋積土中には床面近くより焼土の痕跡が少量であるが認められた。

#### 10号土坑 (Fig. 12)

9号土坑の北側に位置する。長径3.1m×短径2.8m、深さ80cmの方形に近い不定形平面の土坑である。

#### 11号土坑 (Fig. 13)

長径2.55m×短径2.5m、深さ40~50cmの円形に近い不定形土坑である。

#### 12号土坑 (Fig. 14)

4号土坑東側に位置する。長径2.6m、短径1.3m、深さ25~30cmを計る楕円形に近い長方形土坑である。

#### 13号土坑 (Fig. 15)

2号土坑の南側に位置する。長径1.25m×短径1.11m、深さ0.26mの円形に近い土坑である。

#### 14号土坑 (Fig. 18)

7号土坑の北側に位置する。長径2.15m×短径0.8~1.2m、深さ10~15cmの長楕円形に近い不定形土坑である。

#### 15号土坑 (Fig. 17)

2号土坑の北側に位置する。長径1.8m×短径1.5m、深さ0.22mの円形に近い不定形土坑である。

#### 16号土坑 (Fig. 16)

15号土坑の北側に位置する。長径1.76m×短径1.46m、深さ0.2mの楕円形に近い不定形土坑である。

## 2、遺 構 B地区

尾根上の北西部に位置し、調査範囲は $70\text{ m} \times 70\text{ m}$ の区域である。この地区では33基の土坑が確認された。

### 1号土坑 (Fig. 20)

30号土坑の東側に位置する。短径 $2.9\text{ m}$ ×長径 $5.9\text{ m}$ 、深さ約 $40\text{ cm}$ の不定形平面をもった土坑内中央には短径 $1.1\text{ m}$ ×長径 $1.3\text{ m}$ 、深さ約 $30\text{ cm}$ の掘り込みが認められ内部には礫が集石されている。

### 3号土坑 (Fig. )

1号土坑の北側に位置し重複するが、1号土坑に切られている。残存する土坑での長径は $1.7\text{ m}$ ×短径 $1.2\text{ m}$ 、深さ $10\text{ cm}$ 程の不定形土坑である。

### 5号土坑 (Fig. 29)

20号土坑の南側に位置する。短径 $1.9$ ×長径 $4.6\text{ m}$ 、深さ $10\sim 15\text{ cm}$ の南北に長い不定形土坑である。床面には北側に3個、南側に1個のビットが認められる。

### 6号土坑 (Fig. 30)

22号土坑の南東端と切り合っているが、22号土坑を切っている。短径 $0.8\text{ m}$ ×長径 $1.1\text{ m}$ 、深さ約 $10\text{ cm}$ の長方形に近いが不定形土坑である。

### 22号土坑 (Fig. 30)

南東端で6号土坑と重複するが、6号に切られている。短径 $3.25\text{ m}$ ×長径 $4.4\text{ m}$ 、深さ $0.6\text{ m}$ の不定形土坑である。南側、東側、西側に合計7個の大小ビットが認められる。

### 7号土坑 (Fig. )

8号土坑と隣接して北側に位置する。底面での径約 $1.3\text{ m}$ の円形平面をもったフラスコ状ビットである。床面はロームそのものでかたく、ほぼ平である。また床面には径 $7\sim 15\text{ cm}$ のビットが合計8個穿たれている。

### 8号土坑 (Fig. )

7号土坑の北側に位置する。長径 $2.1\text{ m}$ ×短径 $1.9\text{ m}$ 、深さ $40\sim 50\text{ cm}$ の南北方向に長い不定形土坑である。床面はロームそのものでは平である。

#### 10号土坑 (Fig. 23)

11号土坑の南西に位置する。長径2.4 m × 短径1 m、深さ約65cmの東西に長い不定形土坑である。床面はロームそのものではほぼ平である。

#### 11号土坑 (Fig. 24)

10号土坑の北東に位置する。長径1.8 m × 短径1.1 m、深さ20~25cmの東西に長い不定形土坑である。床面中央よりやや東よりに長径40cm × 短径30cm、深さ5 cm程の掘り込みが認められる。

#### 12号土坑 (Fig. 28)

33号土坑の北側に位置する。長径3.65 × 短径1.03 m、深さ0.11 mの東西方向に長い不定形土坑である。床面はロームそのもので若干の凹凸が認められる。土坑内西側で4個、東側で1個のピットが認められる。

#### 14号土坑 (Fig. 27)

13号土坑の東に位置する。長径2.17 m × 短径1.64 m、深さ0.11 mの不定形土坑である。

#### 15号土坑 (Fig. 25)

14号土坑の南東側に位置する。長径1.04 m、短径0.88 m、深さ約0.13 mの楕円に近い不定形土坑である。

#### 20号土坑 (Fig. 32)

5号土坑の北側に位置する。長径1.05 m × 短径0.8 m、深さ20cmの不定形土坑である。

#### 21号土坑 (Fig. 31)

5号土坑の西側に位置する。長径1.4 m × 短径0.45 m、深さ0.08 mの不定形土坑である。土坑内西側壁で径12~15cm、深さ5~10cmのピットが3個認められる。

#### 23号土坑 (Fig. 33)

24号土坑の南側に位置する。長径1.52 m × 短径0.87 m、深さ0.1 mの不定形土坑である。

#### 24号土坑 (Fig. 35)

23号土坑の北側に位置する。長径1.89 m × 短径1.58 m、深さ0.15 mの不定形土坑である。

#### 25号土坑 (Fig. 34)

B地区南側コーナー付近に位置するが、東側は未調査区であるため全体を把握していない。残存

する場所で長径1.3 m×短径1.05 m、深さ約10 cmの東西に長い不定形土坑である。

#### 26号土坑 (Fig. 36)

7号土坑の北東に位置する。長径1.7 m×短径1.3 m、深さ0.08～0.1 mの不定形土坑である。北側で長径0.6 m×短径0.45 m、深さ8～10 cmの落ち込みが認められる。

#### 27号土坑 (Fig. 37)

28号土坑の北西に位置する。長径1.1 m×短径0.7 m、深さ8～10 cmの南北方向に長い不定形土坑である。

#### 28号土坑 (Fig. 38)

27号土坑の東側に位置する。長径1.17 m×短径1.07 m、深さ0.14 mの円形平面に近い土坑である。

#### 29号土坑 (Fig. 40)

28号土坑の東側に位置する。長径1.05 m×短径0.9 m、深さ0.16 mの楕円形に近い不定形土坑である。

#### 30号土坑 (Fig. 39)

1号土坑の西に位置する。長径1.27 m×短径1.18 m、深さ0.1 mを計る円形に近い不定形土坑である。

#### 31号土坑 (Fig. 41)

27号土坑の北東側に位置する。長径1.53 m×短径1.3 m、深さ0.22 mを計る不定形土坑である。

#### 32号土坑 (Fig. 42)

11号土坑の西側に位置するが北側は未調査区であるため全体は把握できない。残存する部分で長径1.4 m×短径0.95 m、深さ0.21 mを計る不定形土坑である。

#### 33号土坑 (Fig. )

12号土坑の南側に位置する。長径1.72 m×短径1.57 m、深さ0.25 mの楕円形に近い不定形土坑である。

### 3、出土遺物

A地区・B地区とも縄文時代の土器を主体とする遺物の出土があった。以下、地区別に主な遺物の観察結果を一覧にまとめてみた。

A 地区出土土器観察表 (Fig. 45)

土器	器種(器形)	部位	文様 (①地文 ②主文様 ③施文法 ④付着物 ⑤内面 ⑥その他)
1	深鉢形土器	口縁部	①口縁部はやや肥厚して無文、その下に撚糸文が粗く施文されている
2	"	"	②細沈線の間にアナダラ属の目殻腹縁文、円形竹管による刺突文あり ⑤きれいに磨く ⑥薄手で胎土中に繊維を含まない
3	"	"	
4	"	"	
5	"	胴部	
6	"	口縁部	②口縁部に半截竹管状工具の内側による連続押し引き文が2段、下は同様の工具による細沈線 ⑤磨き ⑥表面は剥落多し
7	"	胴部	①半截竹管状工具による細沈線 ⑤磨き ⑥6と同一個体
8	"	"	②沈線による平行線文や幾何学文 ⑤磨き
9	"	"	②浅い細沈線が格子目状に施文される ⑤磨き ⑥底部に近い破片?
10	"	"	②沈線による平行線文 ⑤幅広の浅い条痕文、きれいな磨き
11	"	口縁部	口縁部は大きく外反する ②太描の集合沈線文 ⑤口縁部に無節斜縄文?
12	"	胴部	①条痕文 ②半截竹管状工具の内側による連続刺突文 ⑤条痕文
13	"	"	①絡条体条痕文 ②低い隆帯に沿って下に連続刺突文 ⑤条痕文
14	"	口縁部	②波状口縁頂部から垂下する連続刺突文、口唇部にも連続する刻み目文
15	"	"	①条痕文 ②口唇部は上方と表・裏面の3面から連続する刻み目文、表面はその下に尖った串状工具による連続刺突文もある ⑤条痕文
16	"	"	
17	"	"	①条痕文 ②波状口縁頂部片、口唇部は表・裏面より連続する刻み目文 ⑤条痕文
18	"	胴部	① " ②横走る低い隆帯の上下から連続する刻み目文
19	"	"	① " ②横走る低い隆帯に沿って連続する刻み目文 ⑤剥落?
20	"	口縁部	① " ②口唇部に連続する刻み目文
21	"	胴部	①⑤条痕文
22	"	"	①⑤ "
23	"	"	①⑤ "
24	"	"	①⑤ "
25	"	"	①⑤ "
26	"	"	①条痕文 ⑤条痕文、やや剥落あり
27	"	"	①⑤条痕文
28	"	"	①⑤ "
29	"	"	①⑤ "
30	"	"	①条痕文 ⑤条痕文、やや剥落あり
31	"	"	①⑤条痕文
32	"	"	①⑤ "
33	"	"	①⑤ "
34	"	"	①条痕文

色調(表)	色調(裏)	胎土(含有物)	厚さ(cm)	焼成
明褐色	明褐色	石英多し	0.8~1.1	良
黄	"	石英・砂粒	0.7	"
明	"	"	"	"
暗	灰	"	0.5~0.7	"
黄	暗黄	"	0.6	"
茶	茶	"	0.7	普通
"	茶-暗	"	"	"
明	黄	"	"	良
"	"	"	0.8	やや良
暗	暗	"	1.0	"
明	"	"	0.9	"
"	黄	"	1.1	普通
"	"	"	1.2	"
暗	"	石英	1.1	"
黄	黒	"	0.8	やや良
暗	"	"	0.9	"
茶	茶	"	1.0~1.6	普通
黄	黄	繊維	1.1	"
明	明	"	0.6	"
淡	淡	繊維少し	0.8	"
"	"	"・石英	1.0	"
明	明	"	1.1	"
"	黄	"	1.0	"
黒	暗	"・石英	0.9	"
茶	明	"	1.0	"
黒	灰	繊維少し	1.2	"
黄	黄	"	0.8~1.0	やや良
明	黒	"	1.0	普通
黄	黄	繊維少し	1.3	"
明	暗	"	1.2	"
"	"	"	1.1	"
"	"	"	1.0	"
暗	灰	"	1.1~1.3	"
明	暗	"	1.3	やや良

A 地区出土土器観察表 (Fig. 54)

No	器種(器形)	部位	文様 (①地文 ②主文様 ③施文法 ④付着物 ⑤内面 ⑥その他)
35	深鉢形土器	口縁部	①条痕文 ②口唇部に絡状体の連続圧痕文 ⑤条痕文、剥落が激しいためあまり明瞭ではない ⑥口径 23.0 cm
36	"	"	①⑤条痕文 ②口唇部に絡状体の連続圧痕文
37	"	"	①⑤ " ② "
38	"	"	①条痕文 ⑤剥落が激しいため、条痕文は明瞭ではない
39	"	"	①広い間隔の条痕文 ②口唇部に連続する刻み目文 ⑤浅い条痕文状の磨き
40	"	胴部	①条痕文 ⑤あまり明瞭ではない
41	"	"	① " ⑤ "
42	"	"	① " ⑤ "
43	"	"	① " ⑤磨き
44	"	"	① " ⑤浅い条痕文状の磨き
45	"	"	① " ⑤あまり明瞭ではない
46	"	"	①⑤条痕文
47	"	"	①⑤ "
48	"	"	①条痕文 ⑤磨き、条痕文は明瞭ではない
49	"	"	① " ⑤ "、 "
50	"	"	①⑤条痕文
51	"	"	①幅が狭く、浅い条痕文
52	"	"	①条痕文 ⑤剥落が激しい
53	"	"	①⑤条痕文
54	"	"	①⑤ "
55	"	"	①条痕文 ⑤浅い条痕文
56	"	"	①⑤条痕文はあまり明瞭ではない ⑥底部付近の破片
57	"	"	①条痕文 ⑤剥落が激しい
58	"	"	①⑤幅広の浅い条痕文
59	"	"	①幅広の浅い条痕文 ⑥剥落があり明瞭ではない
60	"	底部	①⑤浅い条痕文 ⑥平底の底部
61	"	口縁部	①無節斜細文? ②半截竹管状の浅い凹面による平行沈線を3条単位に施文、⑤浅い条痕文 ⑥口縁部は外半
62	"	"	①無節斜細文? ②半截竹管状の浅い凹面による平行沈線を2条単位に施文、⑤条痕文 ⑥口縁部はやや外反
63	"	胴部	①燃糸文 ⑤磨き?
64	"	"	① " ⑤ " ? ⑥胴下半部の破片?
65	"	"	①条痕文 ⑤浅い条痕文、剥落が激しい
66	"	"	①集合沈線のように、条痕文より深い凹みの沈線
67	"	"	①幅の狭い条痕文 ⑤やや幅広の条痕文
68	"	"	①⑤剥落があり、あまり明瞭ではないが、条痕文 ⑥底部に近い破片?

色調(表)	色調(裏)	胎土(含有物)	厚さ(cm)	焼成
黄~暗褐色	黄褐色	纖維・石英	1.0	普通
黄	暗	・	0.9	”
暗	黄・暗	・	1.0	”
”	”	・	0.9~1.2	”
暗黄	黄	纖維少し・	1.0	”
黄	”	纖維・	”	”
”	”	・	0.9~1.1	”
暗	”	・	”	”
明	明	・	1.0	”
黄	暗	・	1.2	”
”	”	・	1.1	”
黄暗	”	・	”	”
明	黄	・	1.0	”
”	暗	・	”	”
黄	”	・	”	”
暗	”	纖維少し・	”	”
明	”	”	0.8	やや不良
”	黄	纖維・	0.9	”
黄	”	少し・	”	普通
黒	黒	・	”	”
明	黄	少し・	”	”
”	”	・	1.4	”
灰	灰	・	0.8	やや不良
淡	黄	少し・	0.7	普通
明	”	多し	1.0	不良
黄	”	・石英	1.3	普通
明	暗	多し・	1.0	”
”	黒	・	0.9	”
灰	灰	・	0.8	”
明	黄	・	0.7	”
”	暗	多し・	1.0	やや不良
”	”	少し・	”	普通
茶	明	”	1.2	”
明	灰	”	1.0~1.3	やや不良

( Fig. 47・48)

No	器種(器形)	部位	文様(①地文 ②主文様 ③施文法 ④付着物 ⑤内面 ⑥その他)
69	深鉢形土器	口縁部	①燃糸文、施文の方向は一定しない ⑥口縁部に燃糸文 ⑥口縁部は薄くなって外反する。胎土中の繊維は多量
70	"	"	①無節斜縄文 ⑤条痕文
71	"	"	①外反する口縁の下から条痕文 ⑤条痕文
72	"	"	①⑤条痕文
73	"	"	①燃糸文 ⑤口縁付近のみ燃糸文、その下は磨き
74	"	"	①燃糸文の上に条痕文? ⑤口唇部から口縁部に条痕文
75	"	胴部	①斜縄文 ⑤条痕文
76	"	"	①燃糸文 ⑤ "
77	"	"	①無節斜縄文 ⑤剥落のため明瞭ではないが条痕文?
78	"	"	①羽状文状の無節斜縄文 ⑤磨き
79	"	"	①条痕文、方向は一定しない
80	"	"	①⑤条痕文
81	"	"	①燃糸文、施文方向は一定しない ⑤浅い条痕文
82	"	"	① " " " ⑤ "
83	"	"	①格子目状の無節絡条体文 ⑤条痕文
84	"	"	① " " " ⑤剥落のため明瞭ではない
85	"	"	①羽状文状の無節斜縄文
86	"	"	①燃糸文、クロスして2重に施文 ⑤磨き
87	"	"	①格子目状の無節絡条体文 ⑤浅い条痕文、磨き
88	"	"	①無節絡条体文、施文方向は一向しない ⑤浅い条痕文
89	"	"	① " " "
90	"	"	①燃糸文
91	"	"	①幅の狭い条痕文 ⑤条痕文
92	"	"	①無節斜縄文 ⑤浅い条痕文
93	"	"	①格子目状の無節絡条体文 ⑥浅い条痕文
94	"	"	①燃糸文 ⑤浅い条痕文
95	"	"	①燃糸文? ⑤ "
96	"	"	①燃糸文
97	"	"	①上方は条痕文? 下方は燃糸文 ⑤浅い条痕文
98	"	"	①無節絡条体文? ⑤浅い条痕文
99	"	"	①燃糸文 ⑤ "
100	"	"	①無節絡条体文 ⑤幅広の浅い条痕文
101	"	"	① " " ⑤浅い条痕文
102	"	"	① " " ⑤ "
103	"	"	①燃糸文
104	"	"	① " " ⑤剥落のため、明瞭ではない
105	"	"	①羽状文状の無節絡条体文 ⑤浅い条痕文

色調(表)	色調(裏)	胎土(含有物)	厚さ(cm)	焼成
茶褐色	明褐色	纖維多し・石英	0.9	不良
暗	黄	纖維・	0.8	普通
黒色	黒	・	〃	〃
暗褐色	暗	・	0.7	やや不良
黒	暗灰	〃	0.8	普通
黄	暗	〃 少し・石英	0.7	〃
茶	明	・	1.0	〃
明	黄	・	〃	〃
〃	〃	〃 多し・	〃	やや不良
黄	青灰色	〃	〃	普通
黒	明褐色	〃 多し・石英	0.9	やや不良
明	黄	・	1.3	普通
〃	〃	・	1.1	〃
〃	暗	〃 多し・	〃	やや不良
〃	〃	〃 〃 〃	0.8	普通
〃	〃	〃 〃 〃	0.9	やや不良
灰	黒	・	0.8	普通
茶	暗	〃 少し・石英	0.9	〃
明	〃	・	1.0	〃
黒	暗・黄	〃 多し・石英	〃	やや不良
明	暗	〃 少し・	0.9	普通
〃	〃	〃 〃 〃	1.1~1.4	やや不良
〃	黒色	・	0.8	普通
〃	黄褐色	・	1.0	〃
〃	暗	・	〃	〃
〃	黄	・	1.1	〃
〃	〃	・	1.0	〃
茶	〃	〃 多し・	1.1	〃
明	〃	〃 〃 〃	〃	〃
〃	暗	〃 〃 〃	0.8	普通
黒	黄	・	0.9	〃
明	暗	・	1.0	〃
〃	〃	・	〃	〃
〃	黄	・	〃	〃
暗	〃	〃 〃 〃	0.9	〃
明	暗	・	0.8	〃
黒	〃	・	〃	〃

A地区遺跡出土土器観察表 (Fig.47)

No	器種(器形)	部位	文様 (①地文 ②正文様 ③施文法 ④附着物 ⑤内面 ⑥その他)
106	深鉢形土器	胴部	①無節絡条体文
107	"	"	① "
108	"	"	① " 、施文方向は一定しない
109	"	"	① " ⑤浅い条痕文
110	"	"	①摺糸文
111	"	"	①無節絡条体文?、施文方向は一定しない
112	"	"	① " ⑥底部に近い破片
113	"	"	① " ? ⑥ " 、112と同一個体
114	"	口縁部	① " ⑤条痕文 ⑥口縁部は外反
115	"	胴部	① " ? ⑤浅い条痕文?
116	"	"	① " ⑤剥落のため明瞭ではない
117	"	"	①条痕文状の上に浅い3条の細沈線 ⑤剥落のため明瞭ではない

色調(表)	色調(裏)	胎土(含有物)	厚さ(cm)	焼成
黄褐色	黄褐色	纖維 石英	1.1	普通
〃	〃	〃	1.0	〃
黒	暗	〃	0.9	〃
明	黄	〃 多し	〃	〃
暗	暗	〃	1.0	〃
黄	〃	〃 多し	1.1	やや不良
明	黄	〃	1.0	普通
〃	〃	〃	0.9	〃
黒	黒	〃 石英	0.7	〃
明	暗	〃	1.0	〃
黒	黒	〃 多し	〃	やや不良
明	暗	〃	1.2	普通

A 地区遺跡出土土器観察表 (Fig. 48)

No	器種(器形)	部位	文様 (①地文 ②主文様 ③施文法 ④付着物 ⑤内面 ⑥その他)
118	深鉢形土器	口縁部	①格子目文状に無節絡条体文 ⑤条痕文
119	"	胴部	①無節絡条体文 ⑤浅い条痕文
120	"	"	① " ⑤ "
121	"	"	① " ⑤ "
122	"	"	① " ⑤ "
123	"	"	① " ⑤ "
124	"	"	① " ⑤ " ⑥底部に近い破片、119～124は同一個体
125	"	"	①燃糸文、施文方向は一定しない
126	"	"	① " 、 "
127	"	"	①羽状文状の条痕文 ⑤浅い燃糸文
128	"	"	①燃糸文、施文方向は一定しない
129	"	"	①無節絡条体文
130	"	"	① "
131	"	"	① " ⑤浅い条痕文
132	"	"	①格子目文状に無節絡状体文 ⑤条痕文
133	"	"	①無節絡状体文 ⑤条痕文
134	"	"	① " ⑤きれいな磨き
135	"	"	①浅い斜縄文? ⑤条痕文
136	"	口縁部	①LRの単節斜縄文 ⑥口唇部にも同様の斜縄文
137	"	胴部	①RLの " ⑤条痕文
138	"	"	① " "
139	"	"	① " " ⑤磨き
140	"	"	①LRの "
141	"	"	① " "
142	"	"	①RLの "
143	"	"	①羽状文状の単節斜縄文
144	"	"	①RLの単節斜縄文
145	"	"	① " " ⑤剥落が激しい
146	"	"	①羽状文状の単節斜縄文
147	"	"	①RLの単節斜縄文
148	"	口縁部	②口縁に平行する縄文原体の片痕文の間に爪形状の刺突具による刻み目文、口唇部にも同様の文様あり、⑥口縁部内面に炭化物の付着あり、胎土は精選されている
149	"	胴部	②格子目文状の細沈線 ⑥磨き
150	"	"	② " " ⑤ "
151	壺形土器	"	②斜行する細沈線文 ⑥きれいな磨き
152	"	"	①LRの斜縄文、②竹管状工具による交互刺突文による文様の下に沈線文が配される ⑤きれいな磨き
153	"	"	①RLの斜縄文 ②2条の平行沈線文
154	"	"	① " ②竹管状工具による沈線文
155	"	"	① " ② " 平行沈線文



B地区出土土器観察表 (Fig. 49)

No.	器種(器形)	部位	文様 (①地文 ②主文様 ③施文法 ④付着物 ⑤内面 ⑥その他)
1	深鉢形土器	口縁部	①条痕文 ②口唇部に連続刺突文、波状口縁の頂部から垂下する低い隆帯の両脇に連続刺突文 ⑤条痕文
2	"	"	①条痕文 ②口唇部は上方と表・裏面の3面から連続刺突文 ⑤条痕文
3	"	口辺部	①条痕文 ②口縁から垂下した断面3角形の隆帯は横走する同様の隆帯に連絡し、脇に連続刺突文 ⑤条痕文
4	"	"	① " ②横走する断面3角形の隆帯の上下両面から連続刺突文、上面は更にその上を尖った串状工具による連続刺突文 ⑤条痕文
5	"	"	①条痕文 ②連続刺突文 ⑤条痕文
6	"	"	②2条の浅い沈線の間半截竹管状工具の内側で連続刺突文 ⑤浅い条痕文、磨き
7	"	胴部	①条痕文 ⑤条痕文
8	"	"	① " ⑤ "
9	"	"	① " ⑤ "
10	"	"	① " ⑤ "
11	"	"	① " ⑤ "
12	"	"	① " ⑤条痕文なし
13	"	"	①浅い条痕文、底部付近の破片
14	"	"	①条痕文?剥落が多し
15	"	"	①縄文 ⑤条痕文なし
16	"	口辺部	①格子目状の細沈線文 ⑤口縁部付近に細沈線?
17	"	胴部	①無節斜縄文?
18	"	"	① " ?
19	"	"	① " ?
20	"	"	①羽状縄文 ⑤磨き(浅い条痕文状)
21	"	"	① " ⑤ " ( " )
22	"	"	① "
23	"	"	①斜縄文 ⑥磨き(浅い条痕文状)
24	"	"	①無節斜縄文
25	"	"	①単節斜縄文 ⑤磨き
26	"	"	①半截竹管状工具による細沈線 ②幅広の半截竹管状工具による連続押し引き文が2段 ⑤たんねんな磨き
27	"	"	②幅広の半截竹管状工具による連続押し引き文が2段、下には細い竹管状工具の背面を連続押し引きしたような沈線文 ⑤たんねんな磨き
28	壺形土器?	"	①RLの斜縄文 ②横走する1条の細沈線 ⑤よく磨く

色調(表)	色調(裏)	胎土(含有物)	厚さ(cm)	焼成
明褐色	明褐色	石英多し	1.0~1.2	普通
〃	〃	〃・繊維少し	〃	〃
〃	〃	〃	1.0	〃
黄	暗	〃・繊維少し	0.9	〃
明	明	〃	1.0	〃
黄	暗	石英	0.7	〃
明	明	石英多し	1.0	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	0.9	〃
〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃
黄	黄	〃・繊維少し	1.2	〃
明	暗	〃	1.4~1.7	〃
茶	黄	〃	1.2	〃
暗	黒	〃	0.7	〃
〃	暗	〃	0.9	〃
灰	灰	石英・繊維	1.0	やや不良
〃	〃	〃・	0.9	不良
明	明	〃・	1.1	やや不良
明-暗	淡	〃・	1.0~1.1	〃
〃	〃	〃・	〃	〃
黒	暗	〃・	0.8	〃
明	黄	〃・	1.0	〃
暗	灰	〃・	〃	〃
黄	黄-暗	〃・	1.1	〃
〃	黄	やや砂質	0.8	やや良
〃	〃	〃	〃	〃
茶	明	細砂・石英	0.5	良

B 地区、1号土坑遺跡出土土器観察表 (Fig.49)

No.	器種(器形)	部位	文様 (①地文 ②主文様 ③施文法 ④附着物 ⑤内面 ⑥その他)
29	深鉢形土器	口縁部	①絡条体条痕文 ②口唇部は表面と裏面から連続刺突文 ⑤絡条体条痕文
30	〃	胴部	① 〃 ⑤絡条体条痕文
31	〃	〃	①単筋斜縄文 ⑥底部付近の破片、31～34は同一個体
32	〃	〃	① 〃 ⑥ 〃
33	〃	〃	① 〃 ⑥ 〃
34	〃	〃	① 〃 ⑥ 〃
35	〃	〃	① 〃 ⑥ 〃
36	〃	〃	① 〃

色調（表）	色調（裏）	胎土（含有物）	厚さ（cm）	焼成
黄褐色	明褐色	石英多し・	0.9	普通
明	黄	”・	”	”
”	暗	細砂・纖維	1.3	”
”	”	”・”	”	”
”	”	”・”	”	”
”	黒	”・”	1.2～1.3	”
”	”	”・”	0.9～1.2	”
”	”	”・”	1.0	”

A地区出土石器観察表 (Fig. 43・44)

No.	器種	形状	製作技法(表面・裏面=①打面調整 ②器面調整 ③刃部調整 ④使用痕 ⑤その他)
1	尖頭器	柳葉形	両面にたんねんな剥離を加える。断面凸レンズ状。完形品、基部に打面を残す
2	石斧状石器		表面は中央部に、裏面は右半部に自然面を残す。周縁部に調整剥離を施す。石槍に似た形状
3	石槍		薄い剥片の両面に押圧剥離を加える。基部付近を欠損
4	石鏃	三角形	表面は剥片の剥離面を残す。基部付近の一部を欠損、磨滅が激しい
5	“ ?	“	表面は円礫の自然面を残し、周縁部に剥離を施す。裏面は母岩からの剥離面を残し、右側縁に調整剥離
6	“	“	裏面に自然面を残す。表裏面ともたんねんな剥離を施す
7	“	“	やや厚みがあり、裏面の調整剥離は雑である
8	“	“	裏面は平らで、両面とも周縁部にていっせいの剥離を加えている。基部は挟り込みあり、やや厚手
9	搔器		上面に打面を残す。剥片の先端部に両面から剥離を加えて刃部を作り出している。裏面は平らな剥離面が多い
10	削器		上面に打面、表面に円礫の自然面を残す。側縁部に調整剥離を加えたサイドスクレイパー
11	円盤状石器?	楕円形	表裏面とも周縁部から中央に向かっての剥離が施されている
12	剥片?		母岩から剥片を剥離した際の残欠品? 一部に自然面も残る
13	“ ?		先端部の尖った剥片と思われる
14	“ ?		ピエス・エスキューの可能性もあるが、薄い剥片
15	石核		円礫としての自然面を残す。剥片を剥離した残核
16	“		各方向から剥離を加え剥片を剥離している。全くの残核
17	凹石	楕円形	表裏面とも平らで、中央部に浅い凹みがある。側面も含め磨石としても利用されたとと思われる
18	“	“	表裏面とも丸みをおび、中央部に浅い凹みがある
19	“	やや楕円形	表裏面とも平ら、表面と側面に凹みがある。磨石としても利用され、面取りされたように磨滅している
20	“	不正 “	表面は平ら、裏面は丸みをおびる。両面とも中央部に凹みがある。磨石としても利用されている
21	“	楕円形	表裏面とも丸みをおび、表面に浅い凹みがある
22	“	“	表裏面とも丸みをおび、中央部に複数の凹みがある。一部欠損あり
23	“	“	表面は丸みをおび、浅い凹みが2か所ある。裏面は平らである
24	“	やや楕円形	表面はやや丸みをおび、複数の浅い凹みがある。裏面や側面は平らになっている
25	“	不正 “	表裏面とも平らになり、表面は中央部に浅い凹みがある
26	“	楕円形	表面はやや平らで、裏面は丸みをおびている。擦られたような浅い凹みがある
27	“	“ ?	半欠品、表裏面とも丸みをおび、中央部に浅い凹みがある
28	磨石	“	表裏面とも丸みをおび、右側面に擦り減った痕が認められる
29	“	“	表裏面ともやや丸みをおびる。側面にはたたき痕のような凹みが認められる
30	石皿		外周が若干高くなっており、石皿片と思われる
31	“		表裏面ともほぼ平らであるが、大形石皿の破片と考えられる

B地区出土石器観察表 (Fig. 44)

No.	器種	形状	製作技法(表面・裏面=①打面調整 ②器面調整 ③刃部調整 ④使用痕 ⑤その他)
32	石核		上面及び側面には円礫の自然面を残す。平らな上面を打面として剥片を剥離している
33	凹石	円形	厚味のある円礫の中央部に浅い凹みがある。側面にもたたき痕のような痕が認められる

長さ (cm × cm)	厚さ (cm)	石質	○印は 同一石質
6.3 × 2.1	0.8	頁岩	
10.6 × 5.0	2.1	玄武岩?	
6.2 × 2.7	0.5	頁岩	
3.8 × 2.6	0.6	粘板岩?	
4.4 × 2.3	1.0	頁岩	○
3.4 × 2.2	0.7	〃	○
2.9 × 1.8	0.9	〃 ?	
2.8 × 1.6	0.6	頁岩	○
4.7 × 5.7	1.1	〃	○
4.4 × 3.6	0.9	〃	○
4.6 × 3.3	1.4	〃	○
5.1 × 6.4	1.9	〃	○
6.4 × 3.4	1.0	〃	○
2.5 × 2.7	0.5	〃 ?	
2.8 × 5.1	4.1	〃	○
2.4 × 3.5	1.9	〃	
12.7 × 9.3	4.2	安山岩	
12.8 × 8.2	4.7	〃	
10.7 × 7.5	4.5	〃	
10.3 × 6.3	3.0	〃	
10.9 × 8.2	3.6	〃	
12.5 × 8.4	5.6	〃	
10.0 × 8.0	5.0	〃	
10.6 × 7.7	4.4	〃	
7.2 × 9.1	3.8	〃	
12.2 × 7.0	3.8	〃	
5.1 × 7.0	4.6	〃	
11.6 × 8.8	3.2	〃	
11.2 × 9.4	4.5	〃	
8.6 × 6.0	5.7	〃	
9.5 × 12.0	7.3	〃	

長さ (cm × cm)	厚さ (cm)	石質	○
3.2 × 5.5	3.6	頁岩	
8.6 × 7.9	6.1	安山岩	

## ま と め

堰ノ上遺跡A地区及びB地区出土遺物のうち、弥生時代以前のもと考えられる遺物についての若干のまとめを記したいと思う。

### 1. 出土土器について

出土土器は、縄文時代早期から弥生時代後期にまで及ぶ。縄文時代の土器は、稲荷台式に比定される土器（A地区1）が最も古い、大部分は早期末葉の田戸上層式から茅山上層式に比定される時期（条痕文系土器群）のものである。縄文時代前期の浮島式、弥生時代後期の天王山式に比定される土器の出土もあり注目される。

条痕文系土器群では、条痕文を地文として口縁部などに刻み目文が施文される土器（A地区など）、口唇部に絡条体圧痕文を有する土器（A地区35など）、表面は無節絡条体文で裏面には浅く条痕文の施文される土器（A地区100など）、表面は燃糸文で裏面は浅い条痕文が施文される土器（A地区81など）、表面は斜縄文で裏面は条痕文の施文される土器（A地区137など）もあった。無節斜縄文を地文として浅い平行沈線文による幾何学的文様を描いた口縁部片（A地区61、62）も特徴的な土器である。

縄文前期後葉の浮島式系土器はB地区から若干出土している（B地区26、27）。茨城県地方を分布の中心とする土器であり、出土量は少ないものの注目すべき資料である。また、A地区148は類例に乏しく明確なことは言えないが、胎土中に繊維も含んでいないことなどから勘案しても前期の諸磯式期に比定される土器ではないかと思われる。

弥生式土器はA地区で若干（151～155）とB地区で1点（28）出土している。A地区出土の152は竹管状工具による交互刺突文が施されたもので、天王山式土器と考えられる。白河市の天王山遺跡出土土器を標式とするこの種の土器は、福島県地方では中通り地方を中心に多く発見されており、本遺跡からの出土は興味深いものがある。

### 2. 出土石器について

石器類では円礫を利用した縄文時代の凹石類の出土が多いが、旧石器時代の尖頭器なども出土しており、断続的に長期間にわたる人間活動をうかがい知ることができる。

1は柳葉形の尖頭器で、旧石器時代終末期のものである。頁岩を素材とし優美な石器である。

15、16、32は石核である。ローム層中の出土ではないので、縄文時代の石鎌などの剥片石器を製作するための残核と考えておきたい。

なお、図示できなかったが、縦形石匙や石錐も出土している。

凹石類に関しては、いずれも安山岩製の円礫を利用したものである。凹みやたたき痕のある礫は石器として認定し得るが、加工痕の認められないものも多数出土している。遺跡と下方の河川までの比高差は相当あり、加工痕の認められない礫も何らかの目的で遺跡まで運ばれたものと考えられるが、石器としては扱わなかった。しかし、B地区1号土坑のように多量の円礫と共に炭化物が出土している遺構もあり、検討されなければならないであろう。

### 3. 土坑について

A地区からは16基、B地区からは33基の土坑が発見されたが、両地区では形態や分布状況等に若干異なる点もあり、地区別に特徴的な点を述べたいと思う。

A地区では、中央に中世の城館跡に関連すると思われる溝が1条走っており、この溝の両側から発見されている。うち溝の北側にある13号土坑と南側にある14～16号土坑は集石土坑で、土坑上面及び土坑中に円礫や角礫が埋積されていた。縄文式土器などの出土もなく、溝の南側に延びる土塁に沿って所在するような3基の土坑からは、中世の遺構に関連する性格のものと考えられる。

2号・4号土坑は底面にビットが穿たれている楕円形の土坑で、近年注目されている縄文時代の落とし穴（陥穴）に類似している。丘陵の尾根上に設けられた狩猟用の落とし穴と考えてよいと思われる。遺構からの出土遺物はないが、縄文時代のものと考えてよいのではなかろうか。7号土坑はやや浅いが、形態的には類似する遺構である。

土坑というより堅穴状遺構と称する方が適切かと思われるのが9号土坑である。堅穴式住居跡とは言えないが、埋積土中には焼土も発見されており、時期不明の住居の性格の遺構と言える。

B地区は、丘陵尾根上の鞍部付近のやや平坦部に位置し、多数の土坑が確認された。しかし、そのうち20基は深さが10～20cm程度と浅く、楕円形に近いものや不定形の土坑で、所属時期も定かでない。そうした中で、注目されるのが1号土坑であるが、これについては後述することにした。

また、8号・10号土坑はA地区でも発見された落とし穴状の遺構に類似している。しかし、底面にビットが穿たれておらず、やや浅いことがA地区の土坑と異なり気になるところである。

断面がフラスコ状を呈する土坑も発見されている。7号土坑で、底面の平面形は径1.3mの円形である。底面には小ビットも8個穿たれていたが、埋積土中からの出土遺物などは確認できなかった。フラスコ状ビットは栃木県をはじめとする各地の遺跡で発見されているが、縄文時代中期を中心とする時期の遺跡に伴っている例が多いようである。本遺跡では、土坑に伴わないものの縄文時代早期末葉の土器が出土しており、土坑もそのような時期の所産と考えられないわけではないが、早期の袋状（フラスコ状）土坑は、出土例も少ないと思われるので、結論を出すことは控えておきたいと思う。

#### 4. B地区1号土坑について

不定形の大形土坑内の中央にある長径 1.3m を測る土坑で、炭化物や円礫と共に縄文式土器（B地区29～36）が出土している。土器の器面には縄文が施文され、底部に近い破片である。土器は尖底かと思われるが、明瞭ではない。胎土中に繊維を含み、早期末葉の土器かと考えられる。本遺跡では、同様の遺構は他に発見されておらず、遺構の性格等は不明である。

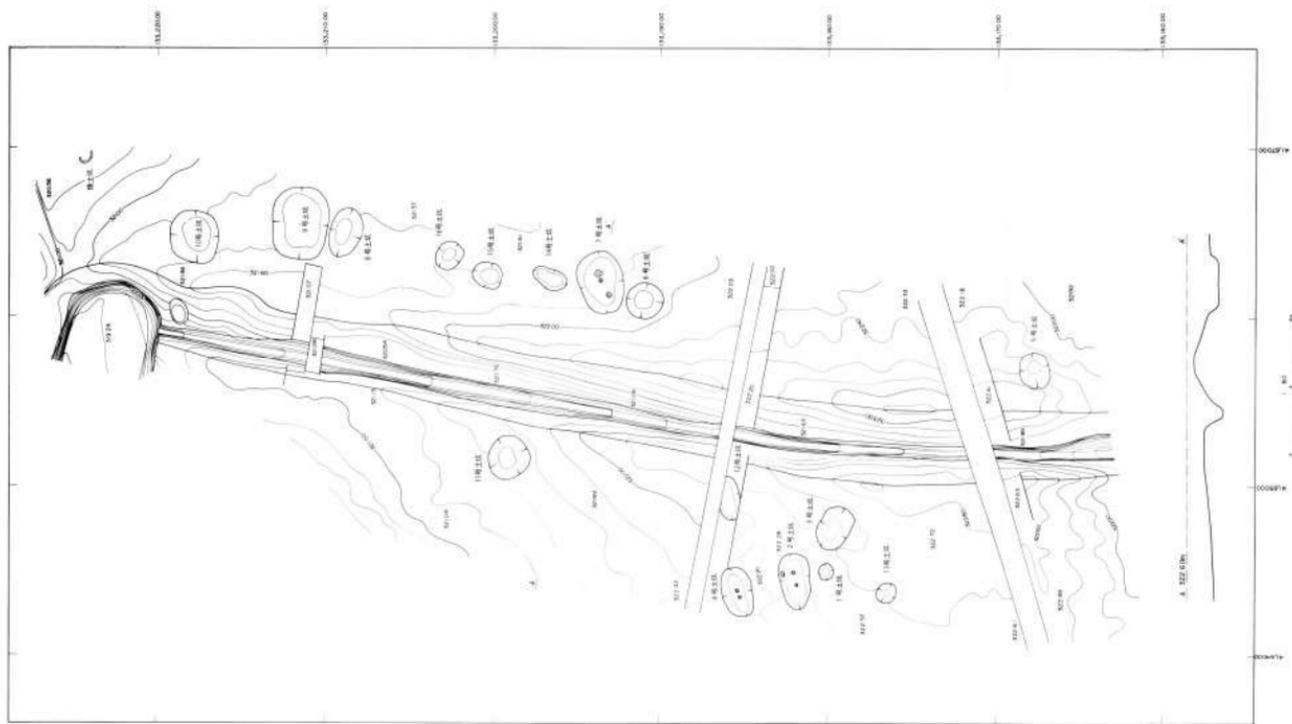


Fig. 3 堀ノ上遺跡 A区全体図

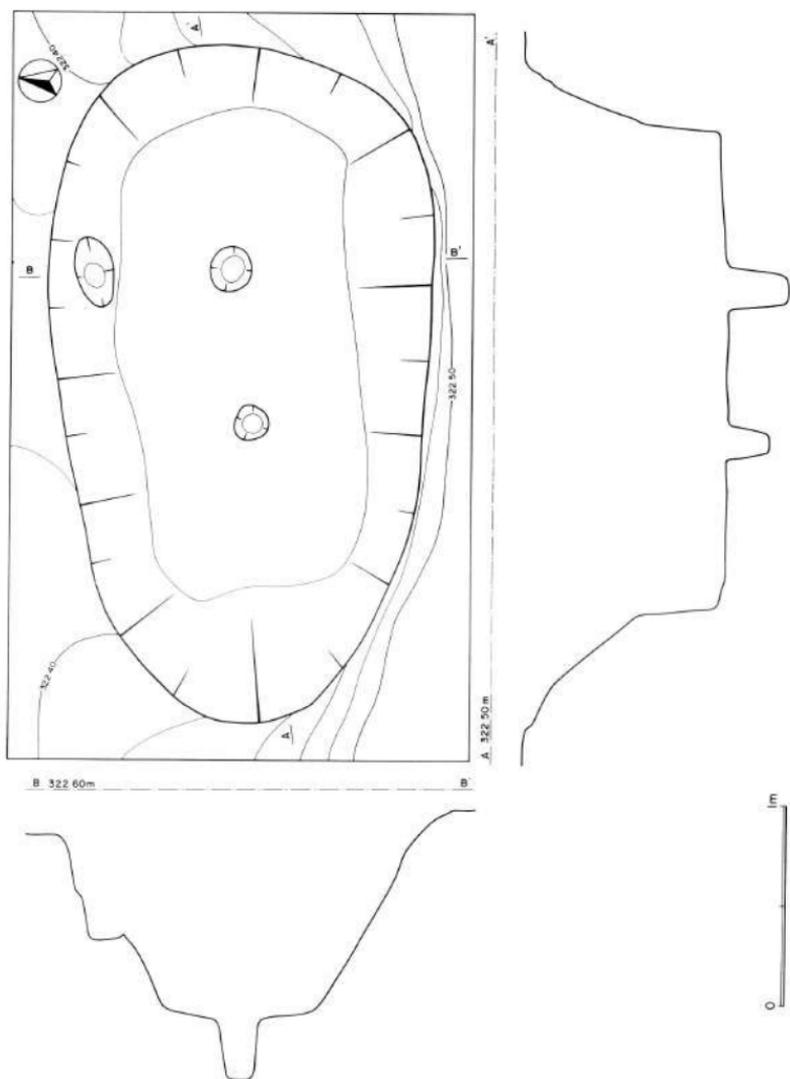


Fig. 4 堰ノ上A地区2号土坑実測図

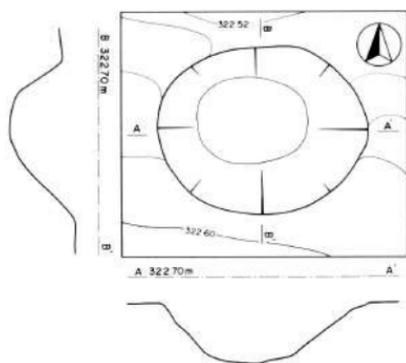
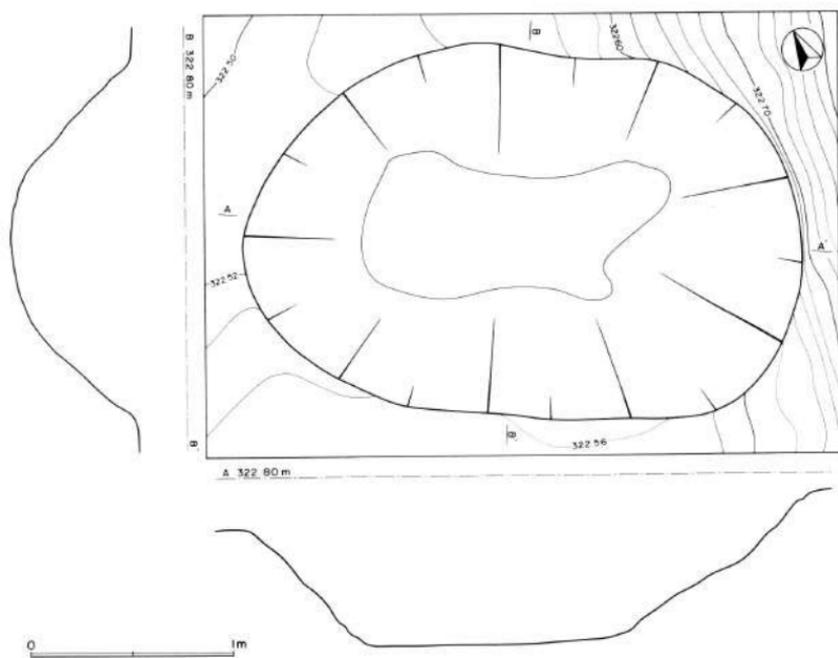


Fig. 5 堰ノ上A地区1号土坑実測図

Fig. 6 堰ノ上A地区3号土坑実測図



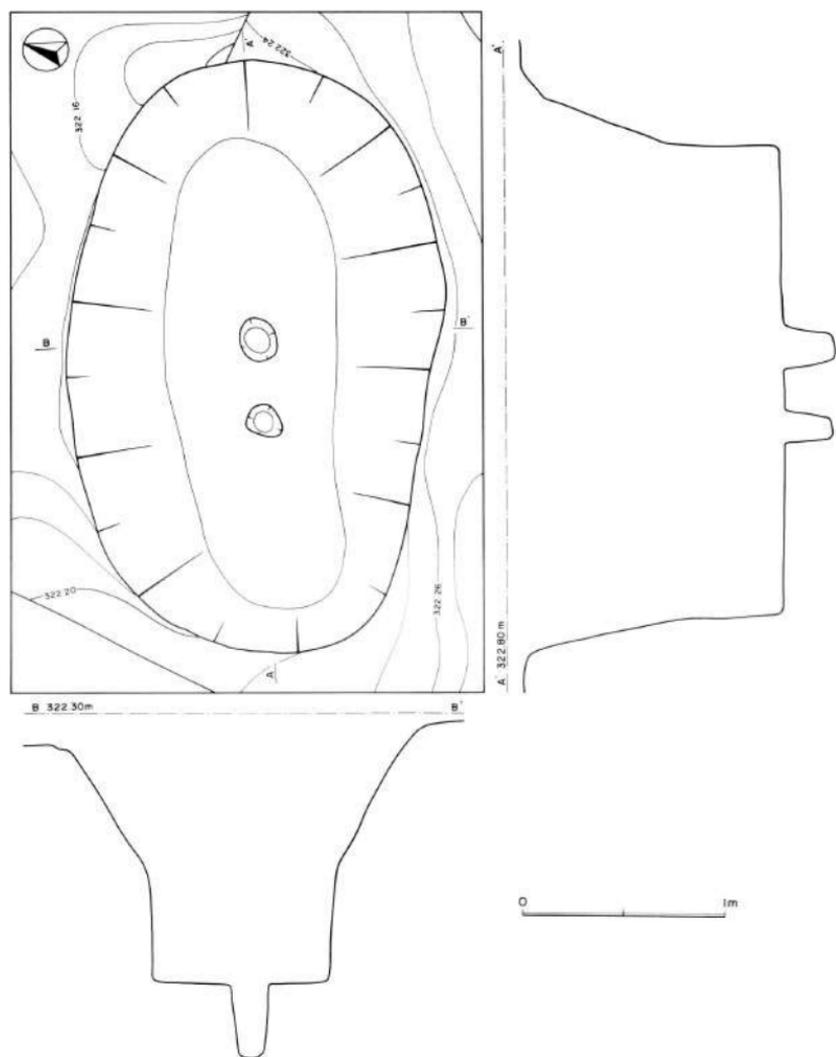


Fig. 7 暖ノ上A地区4号土坑実測図

Fig. 8 堰ノ上A地区6号土坑実測図

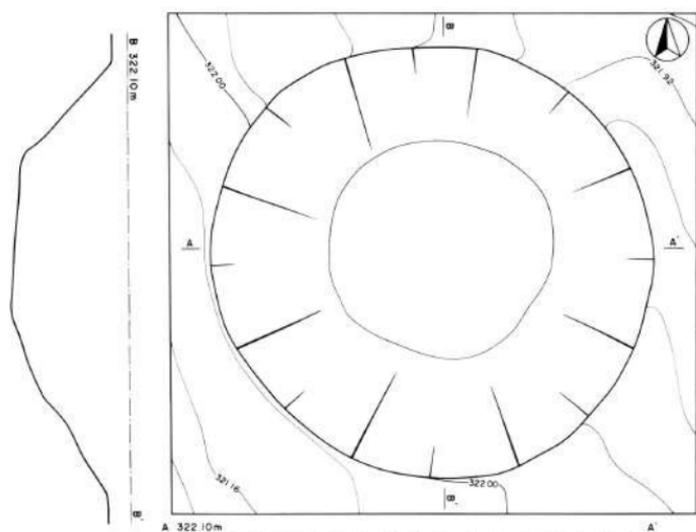
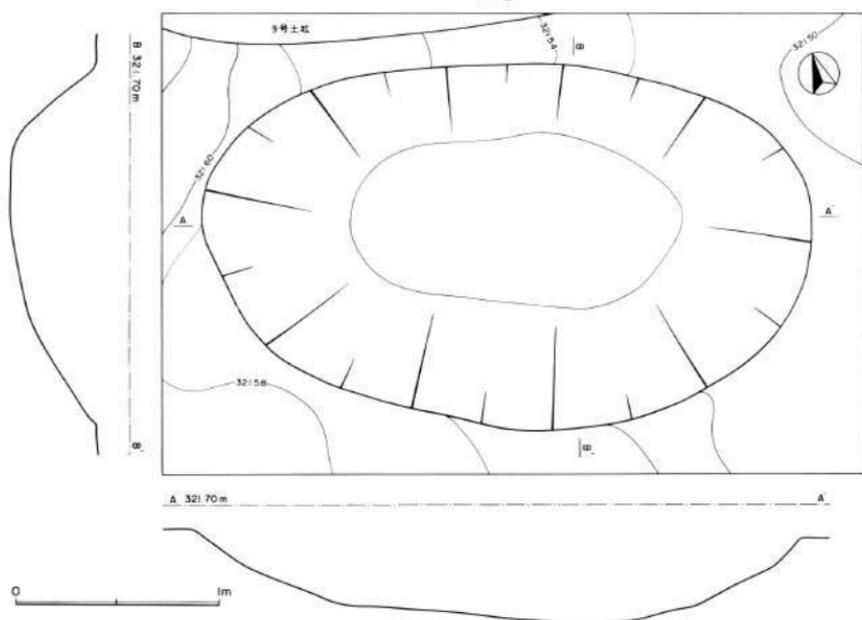


Fig. 9 堰ノ上A地区8号土坑実測図



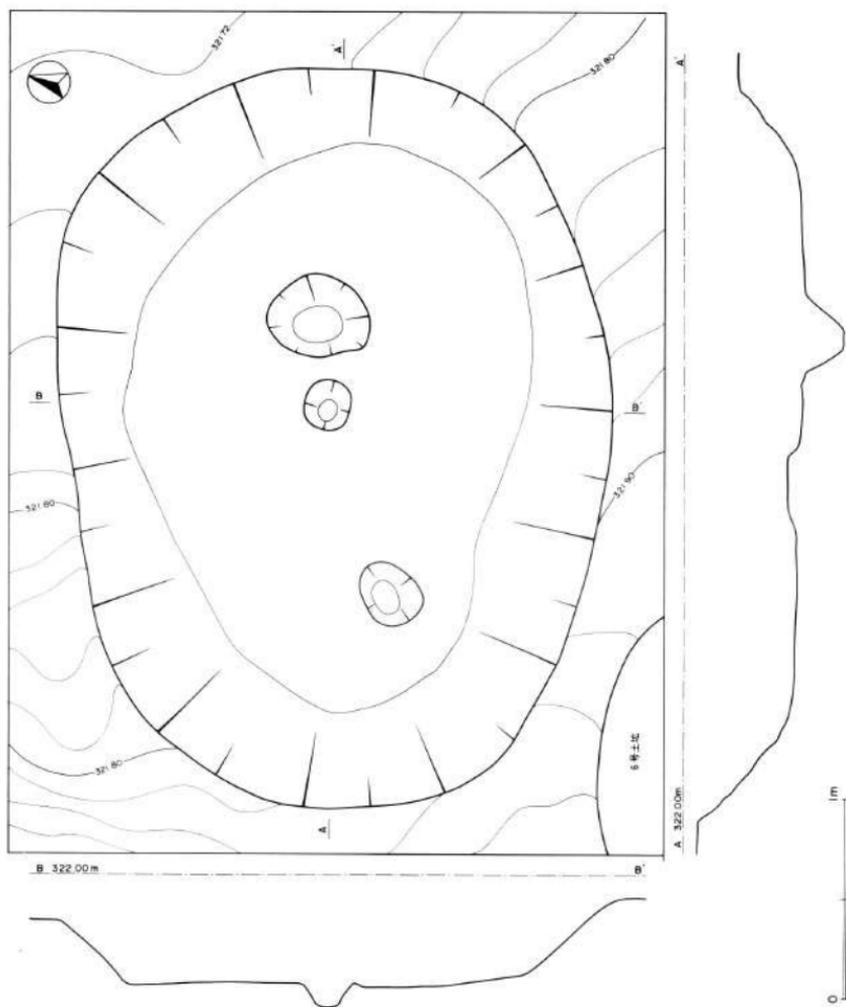


Fig. 10 堰ノ上A地区7号土坑实测图

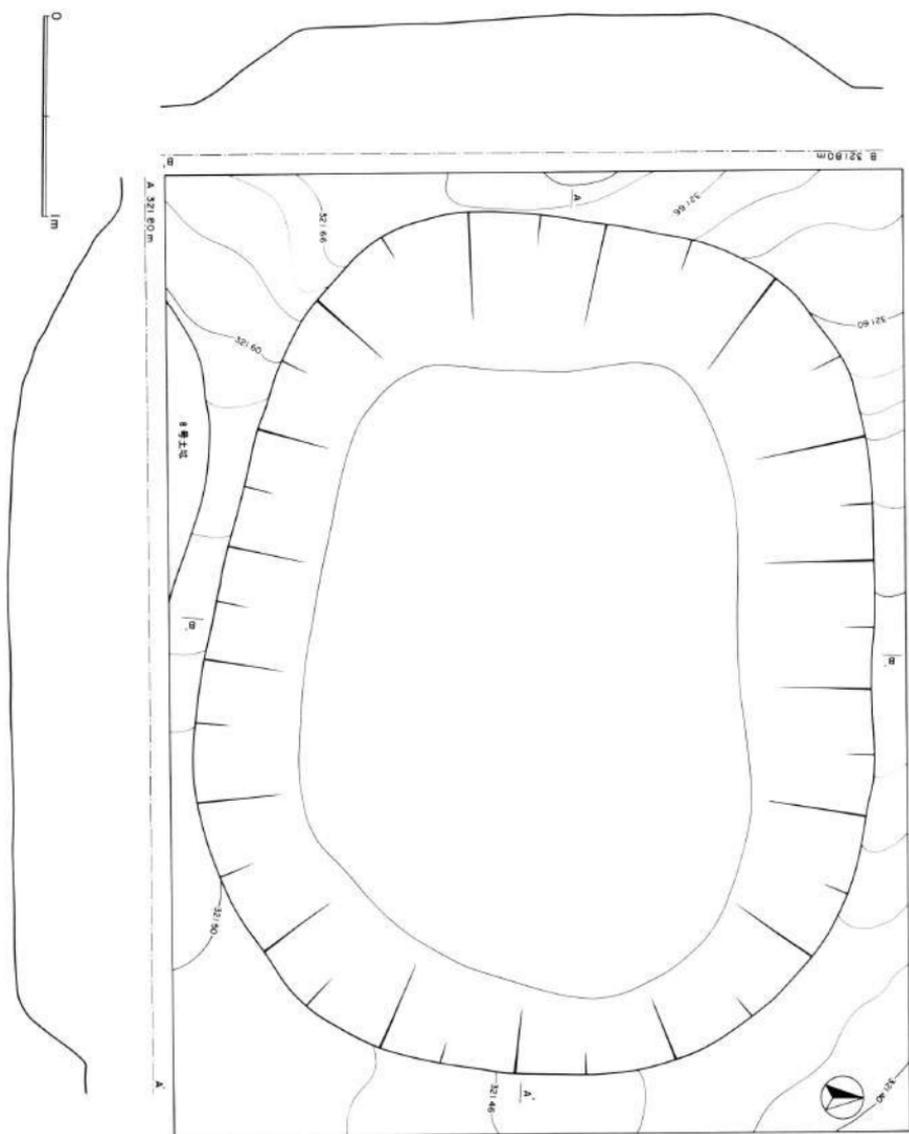


Fig. 11 堰ノ上A地区9号土坑実測図

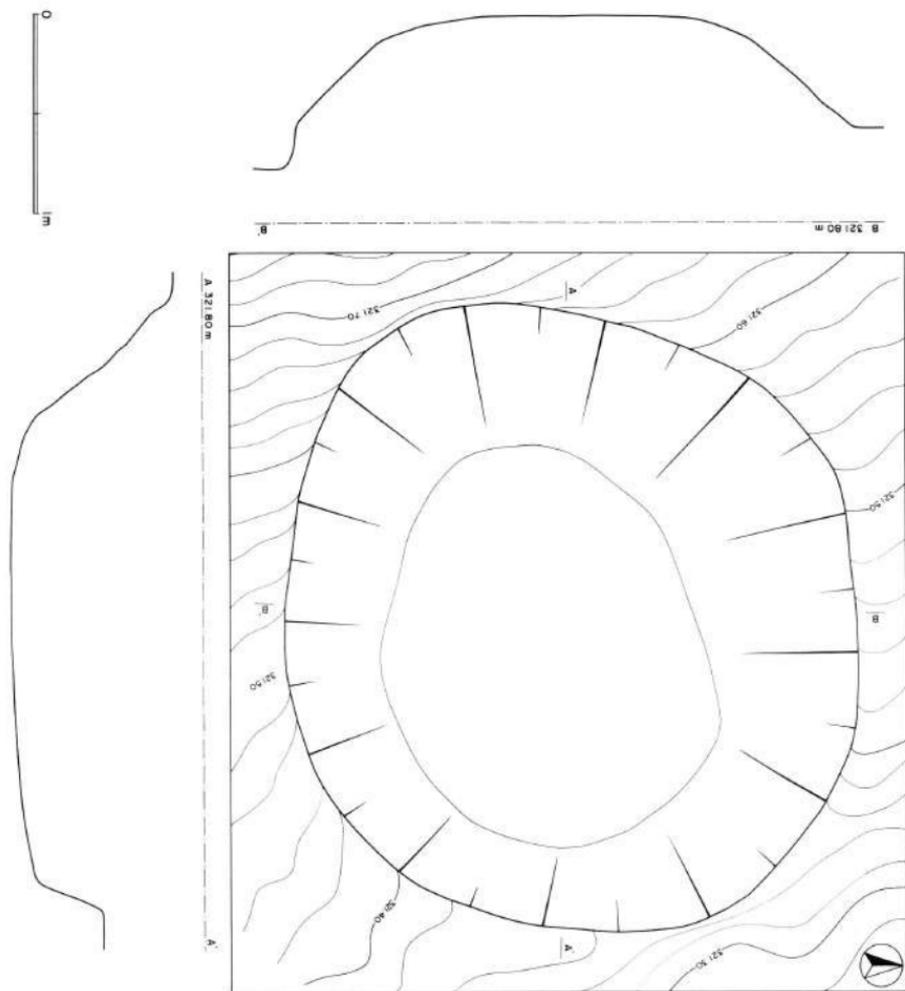


Fig. 12 堰ノ上A地区10号土坑実測図

Fig. 13 堰ノ上A地区11号土坑实测图

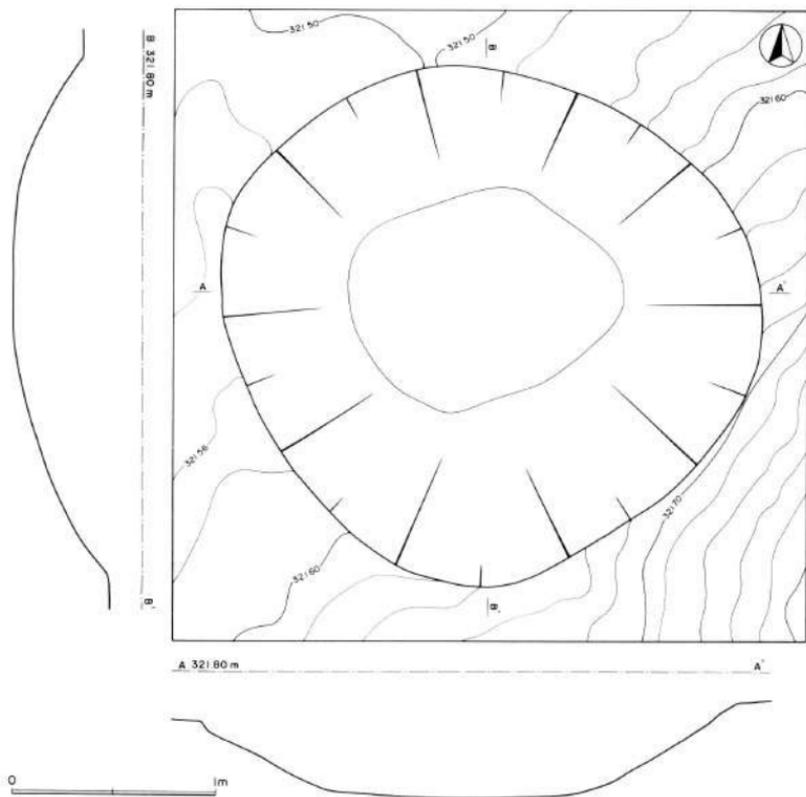
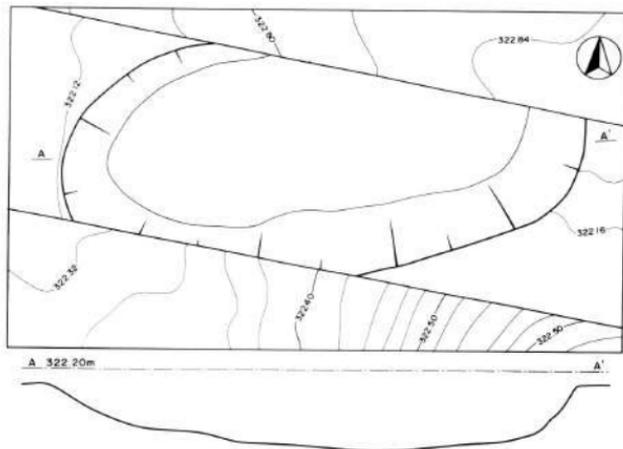


Fig. 14 堰ノ上A地区12号土坑实测图



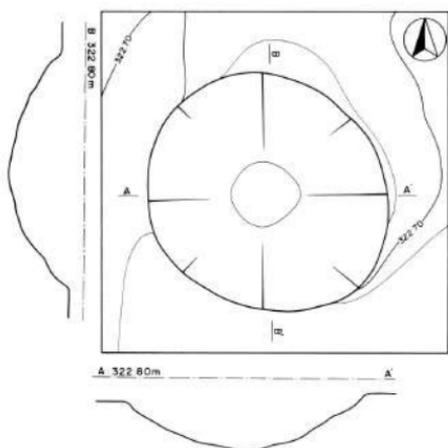


Fig. 15 堰ノ上A地区13号土坑実測図

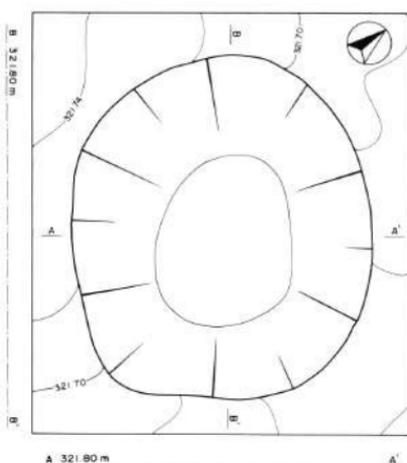


Fig. 16 堰ノ上A地区16号実測図

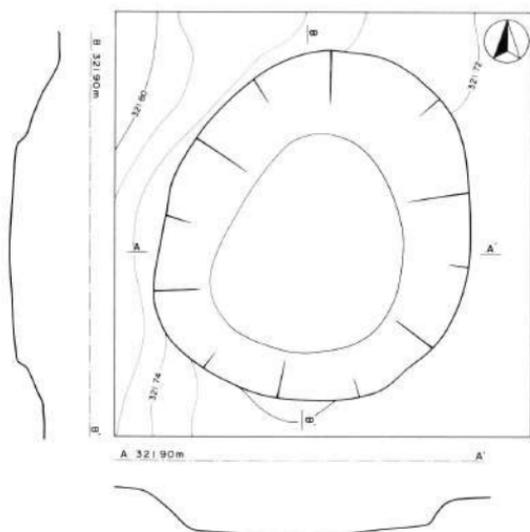


Fig. 17 堰ノ上A地区15号実測図

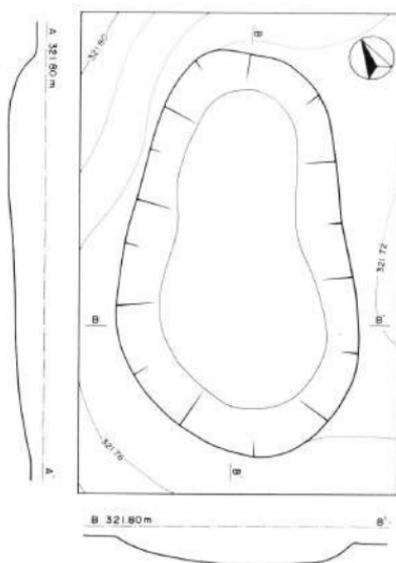


Fig. 18 堰ノ上A地区14号土坑実測図

0 1m

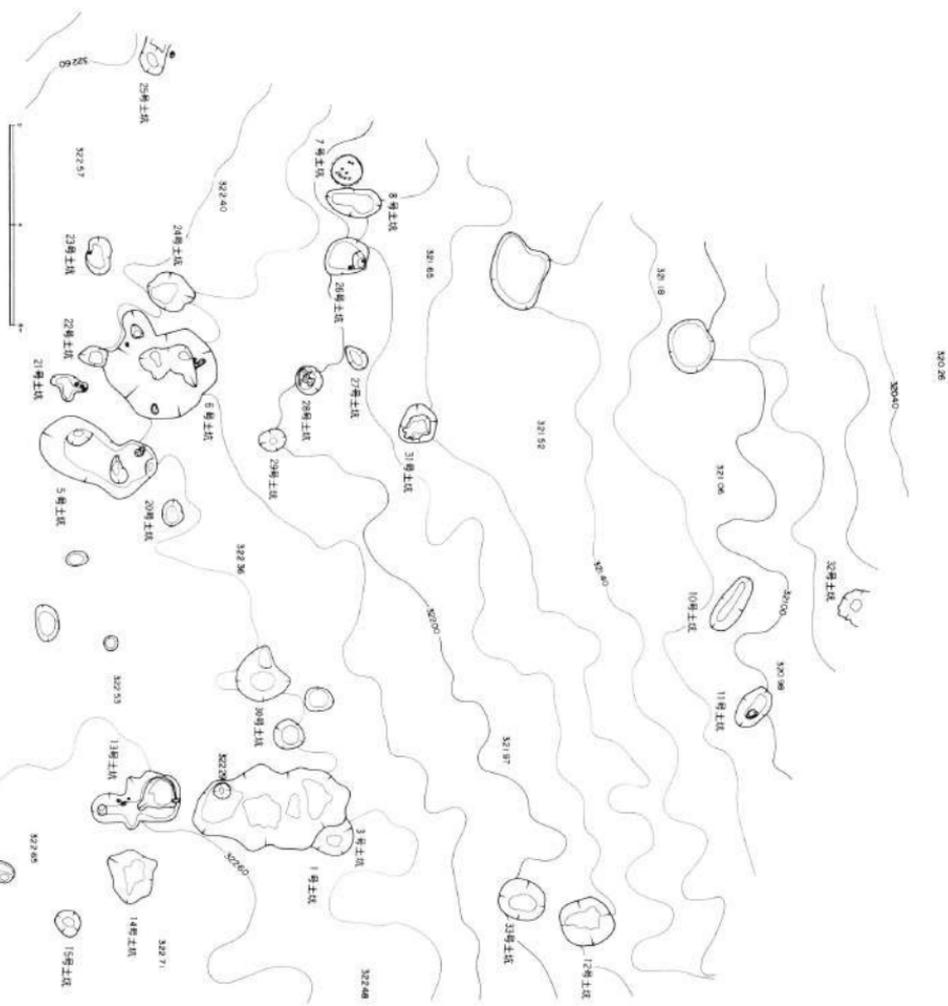


Fig. 19 堀ノ上遺跡 B区 全体図



— 41 — Fig. 20 服ノ上:B地区1号土坑実測図

Fig. 21 堰ノ上B地区33号土坑实测图

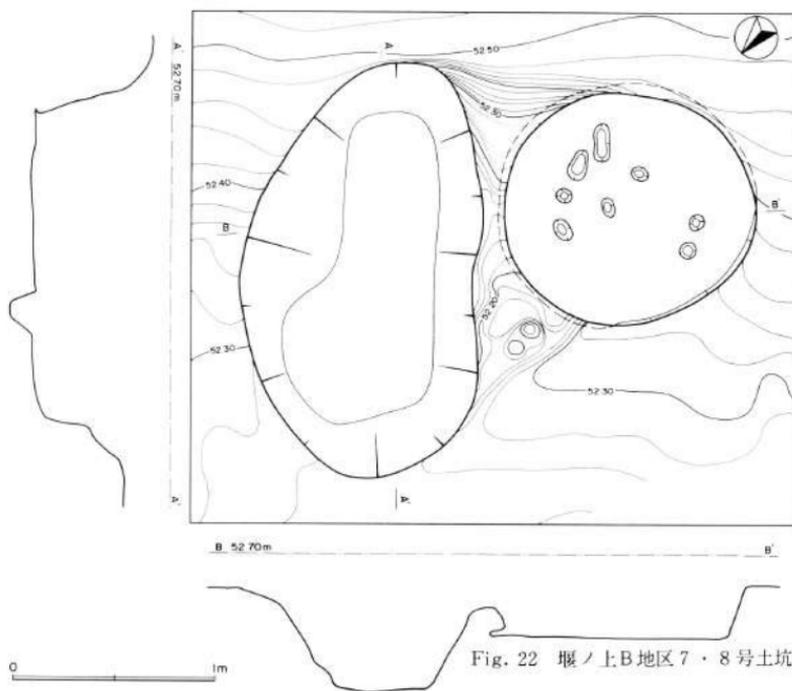
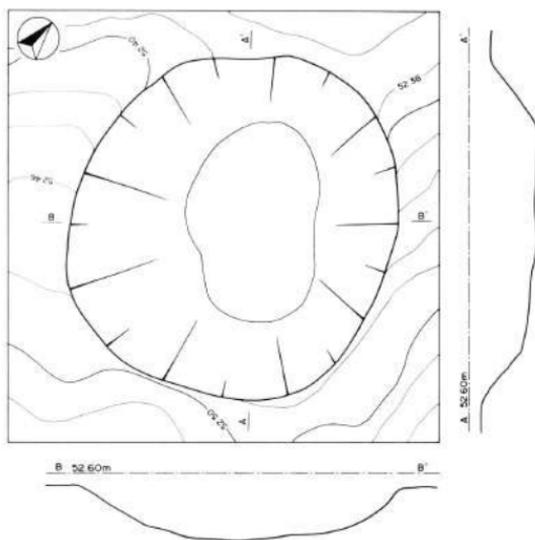


Fig. 22 堰ノ上B地区7・8号土坑实测图

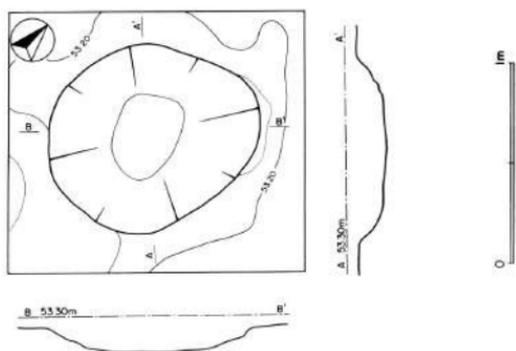


Fig. 23 堰ノ上B地区15号土坑実測図

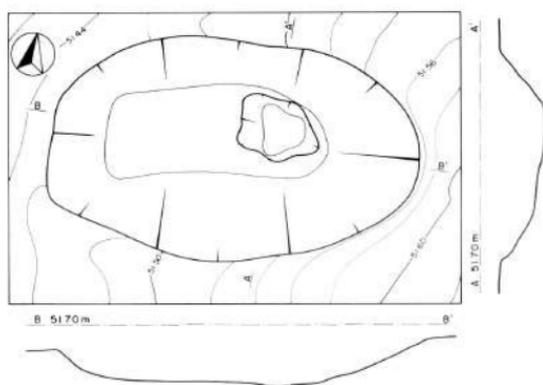
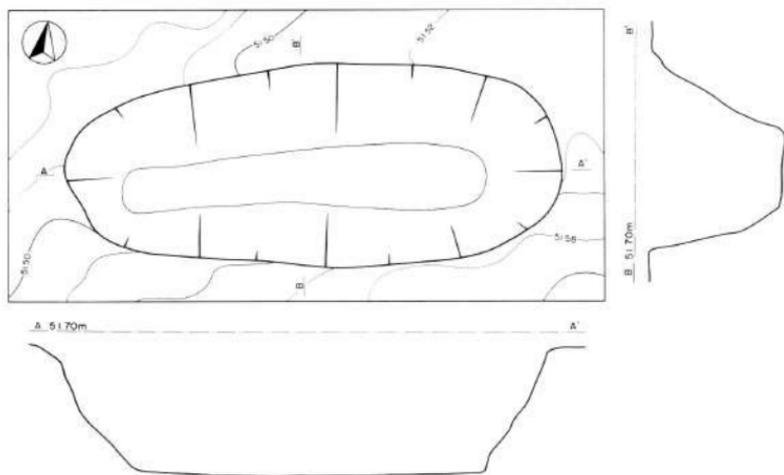


Fig. 24 堰ノ上B地区11号土坑実測図

Fig. 25 堰ノ上B地区10号土坑実測図



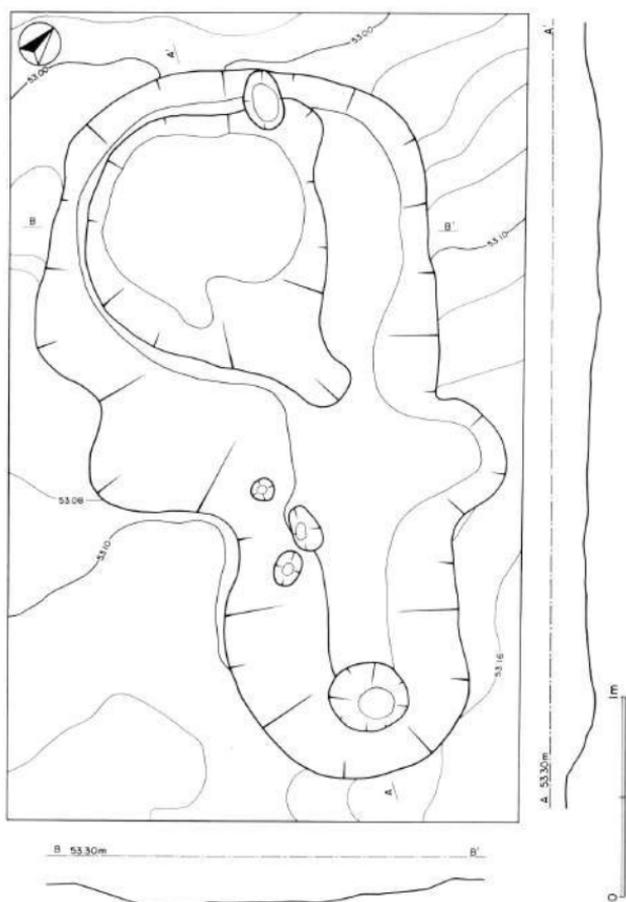
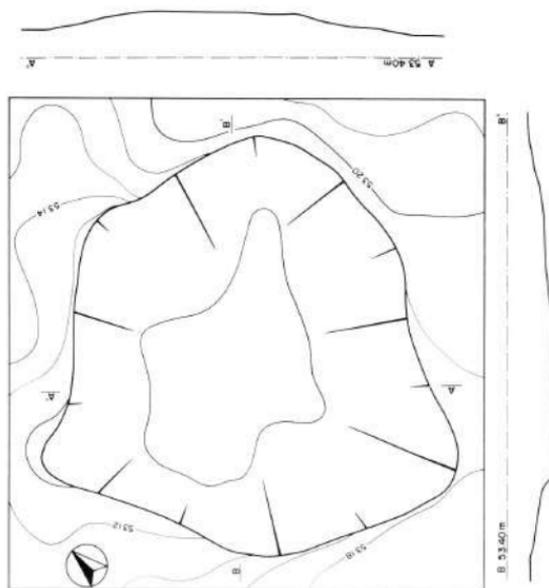


Fig. 26 堰ノ上B地区13号土坑実測図

Fig. 27 堰ノ上B地区14号土坑実測図



0 1m

Fig. 28 堰ノ上B地区12号土坑実測図

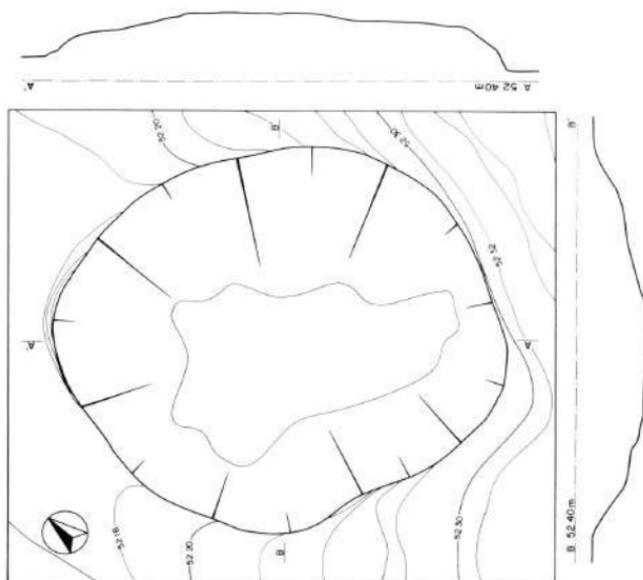




Fig. 29 堰ノ上B地区5号土坑实测图



Fig. 30 堰ノ上B地区6・22土坑实测图

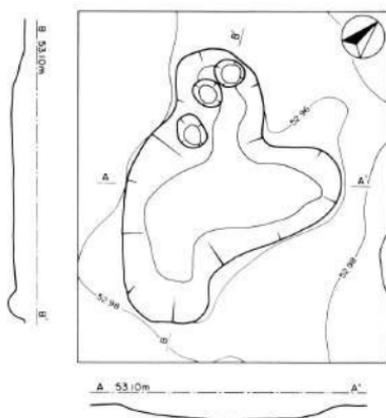


Fig. 31 堰ノ上B地区21号土坑实测图

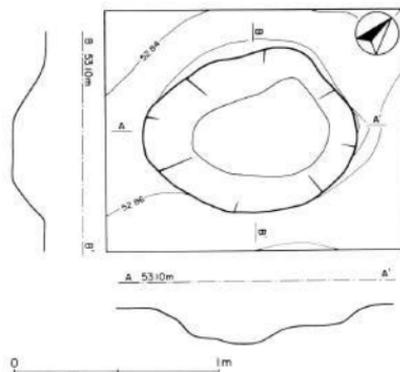


Fig. 32 堰ノ上B地区20号土坑实测图

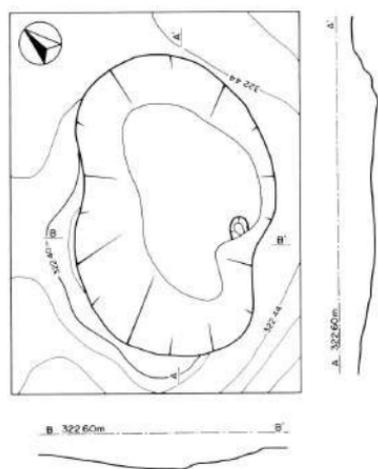


Fig. 33 堰ノ上B地区23号土坑实测图

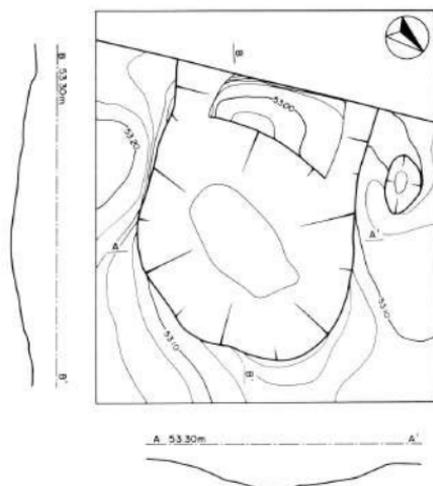


Fig. 34 堰ノ上B地区25号土坑实测图

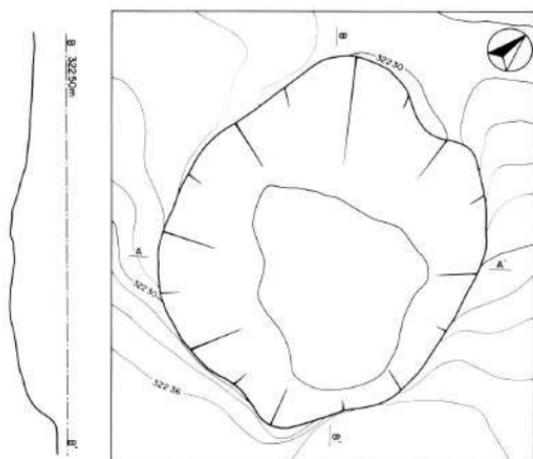


Fig. 35 堰ノ上B地区24号土坑実測図

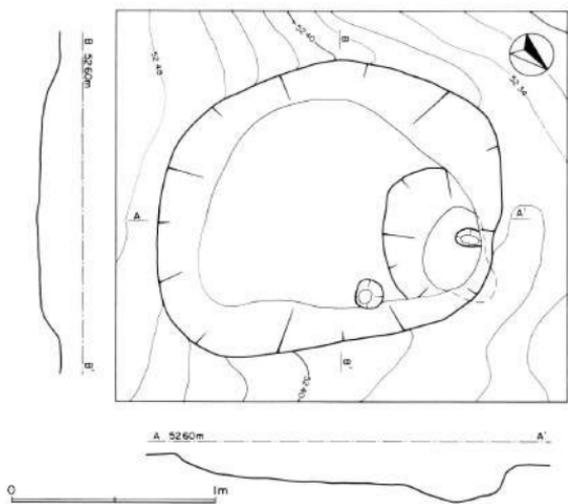


Fig. 36 堰ノ上B地区26号土坑実測図

Fig. 38 堰ノ上B地区28号土坑実測図

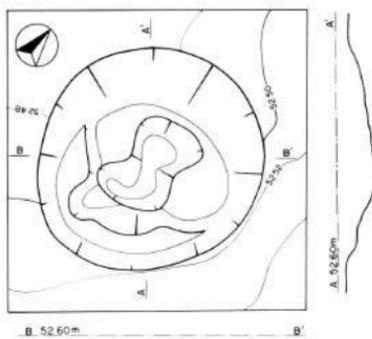


Fig. 40 堰ノ上B地区29号土坑実測図

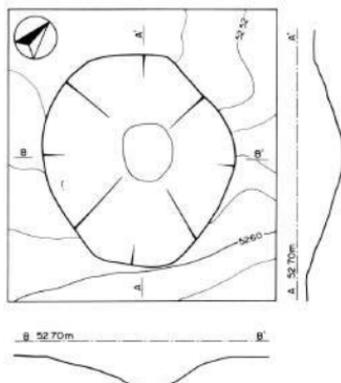


Fig. 42 堰ノ上B地区32号土坑実測図

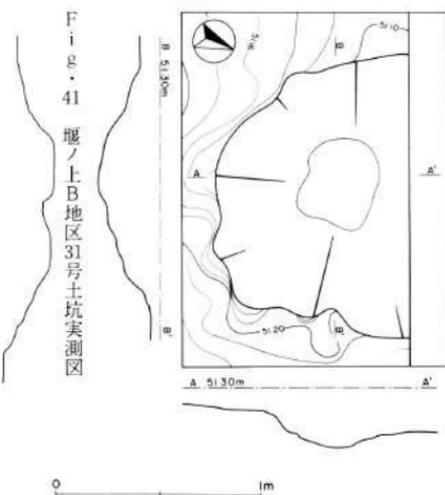


Fig. 37 堰ノ上B地区27号土坑実測図

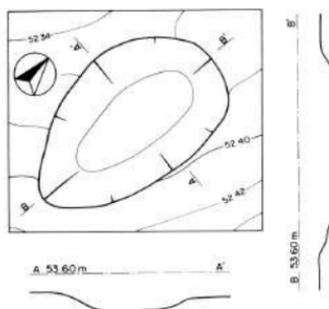


Fig. 39 堰ノ上B地区30号土坑実測図

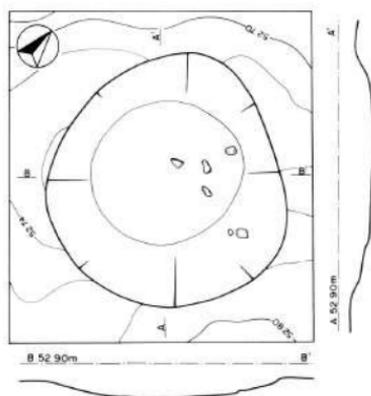
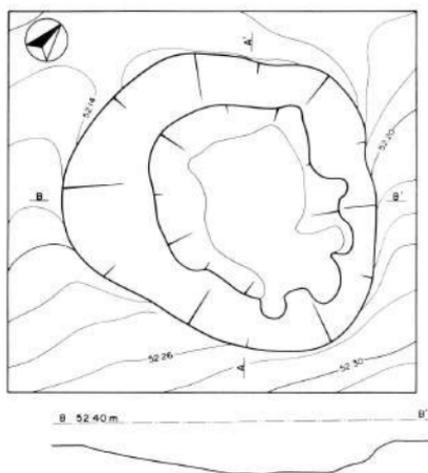


Fig. 41 堰ノ上B地区31号土坑実測図



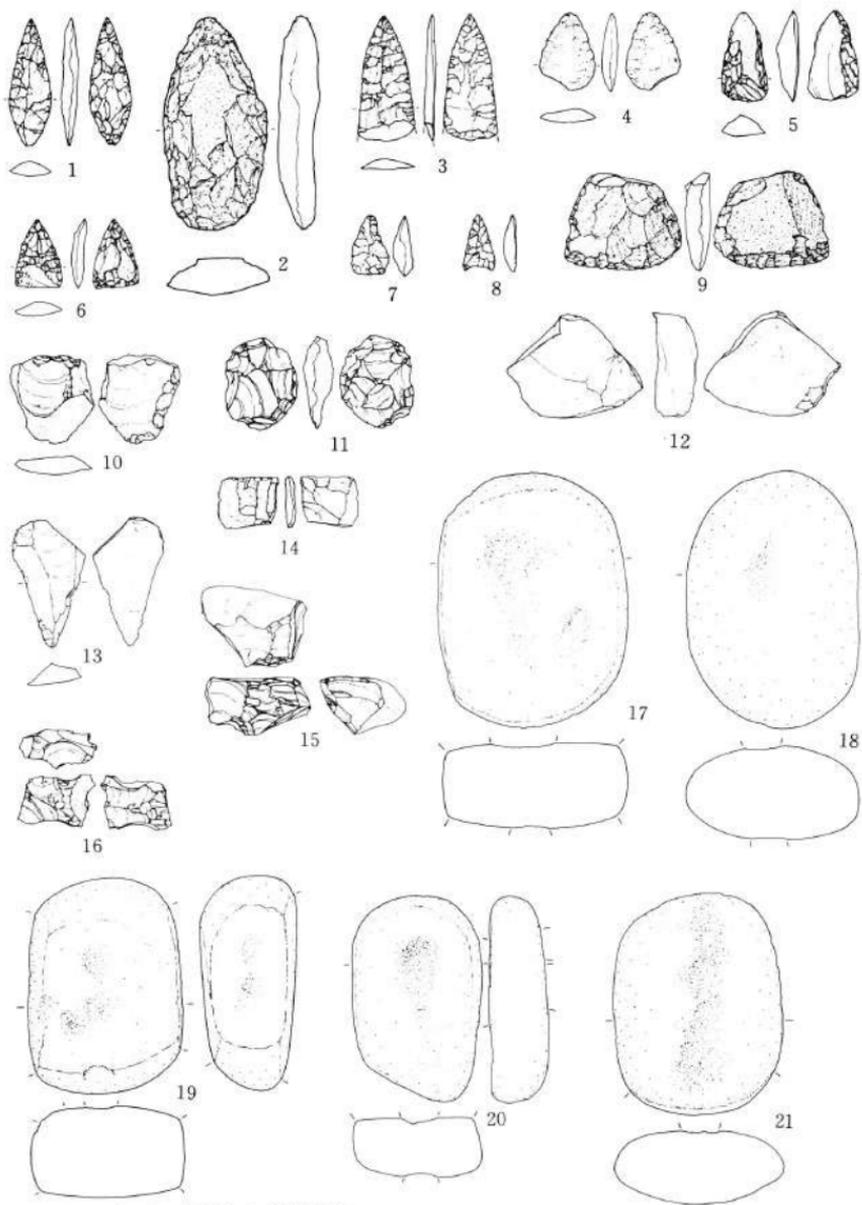


Fig. 43 暖ノ上A地区出土石器実測図

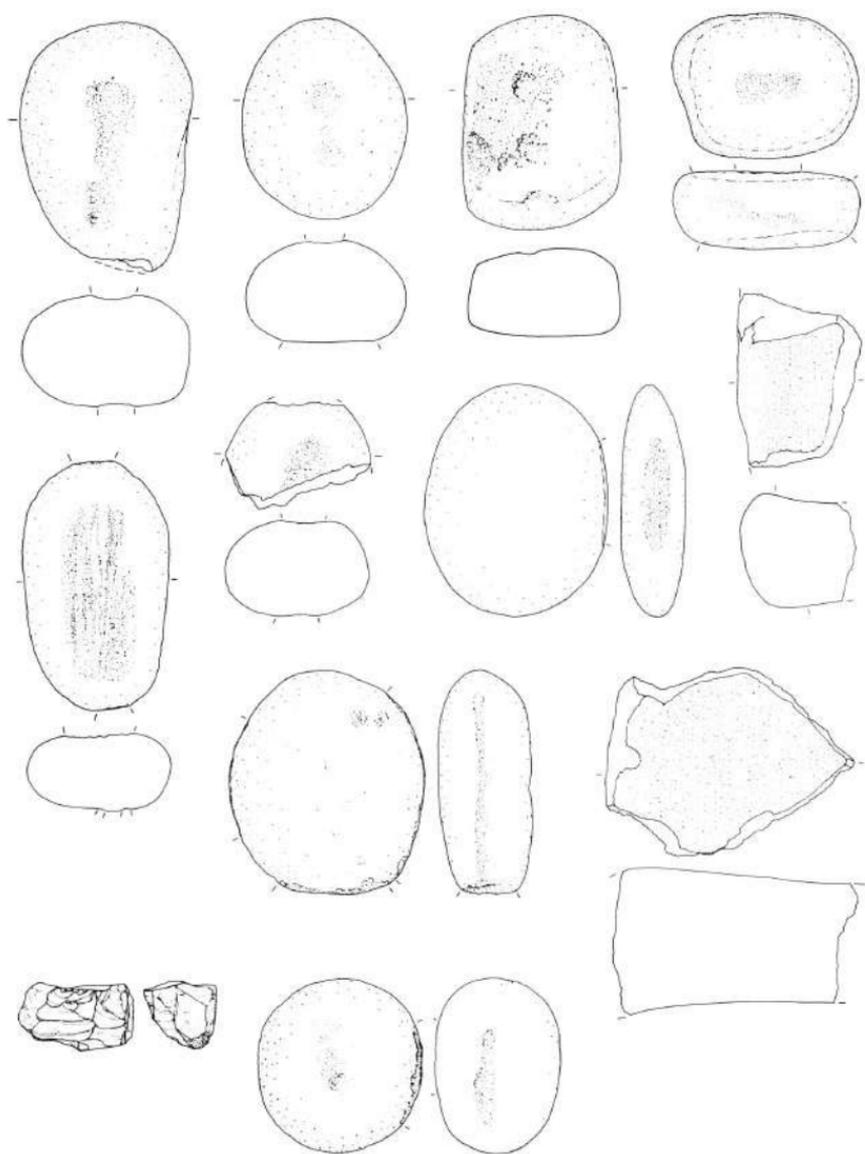


Fig. 44 堰ノ上A地区出土石器実測図  
堰ノ上B地区

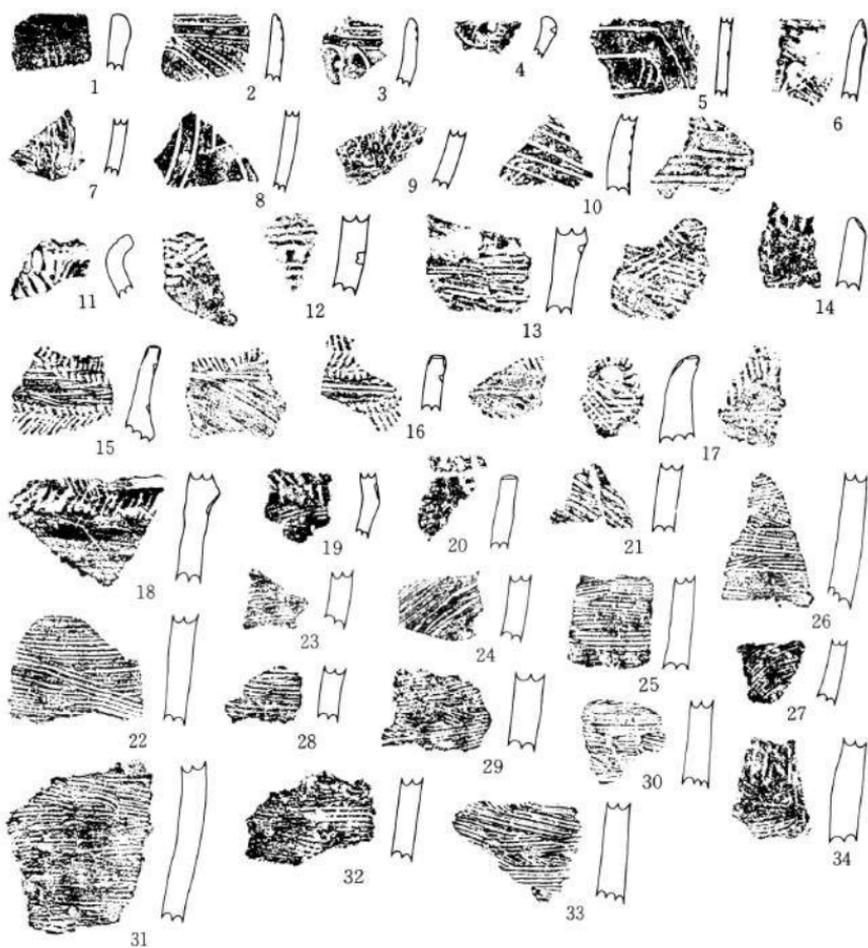


Fig. 45 堰ノ上A地区出土土器実測図①

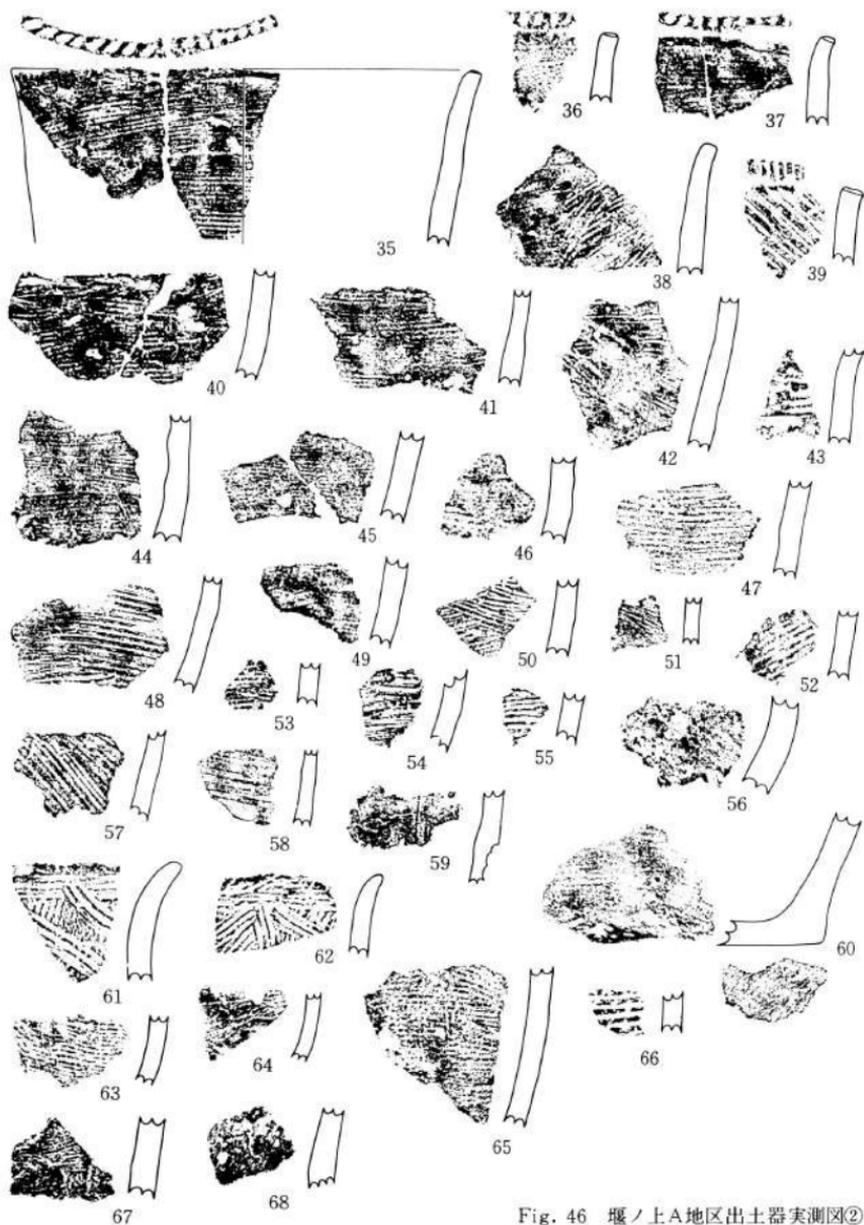


Fig. 46 堰ノ上A地区出土器実測図②

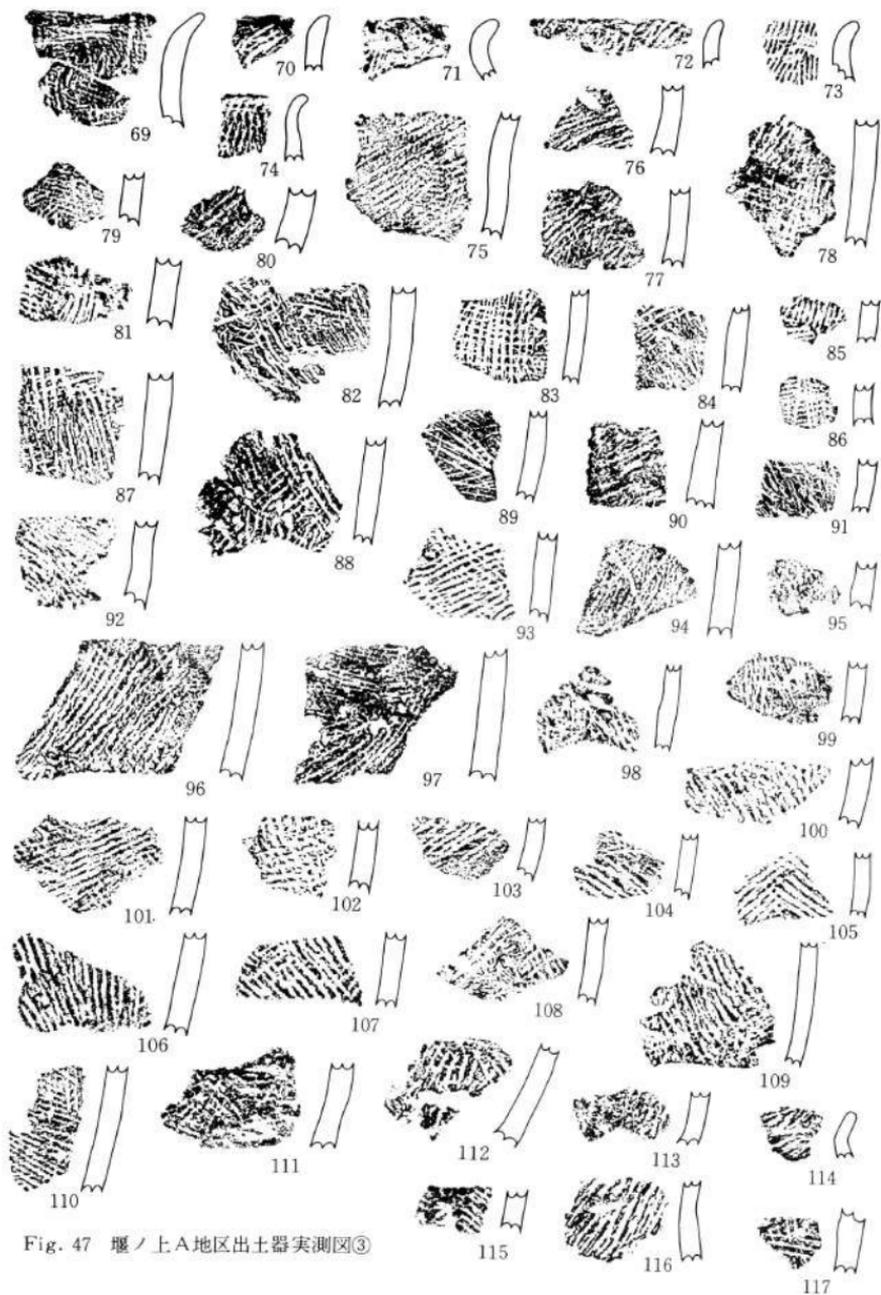


Fig. 47 壙ノ上A地区出土器実測図③

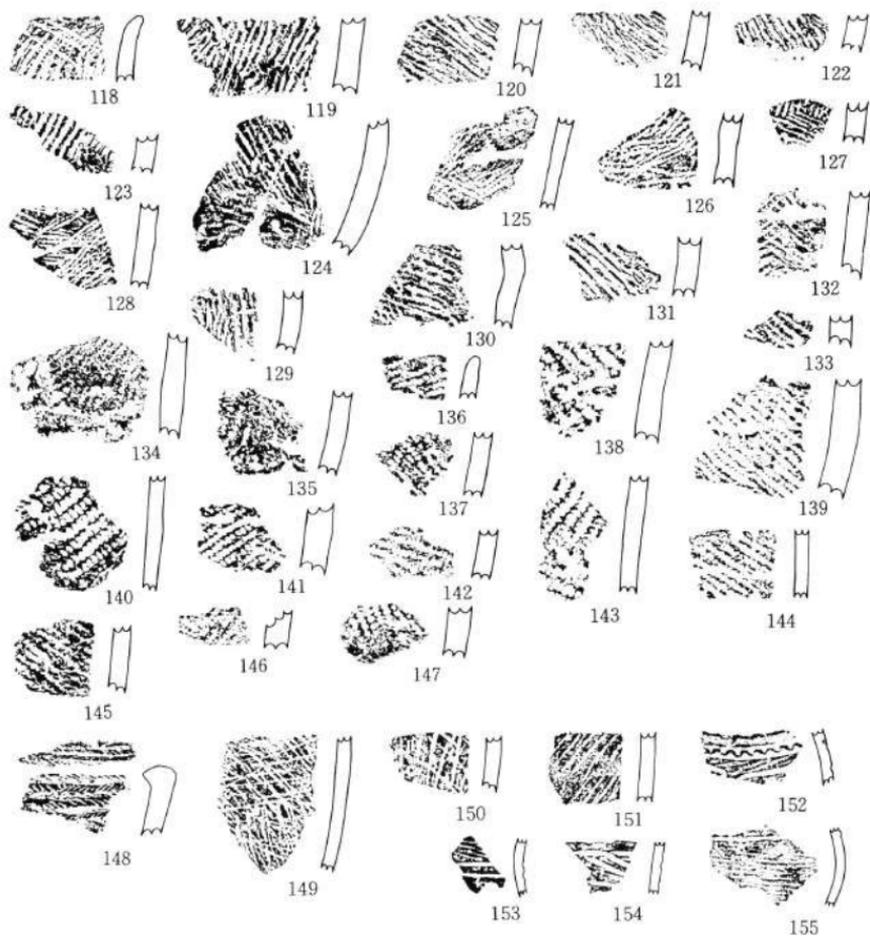
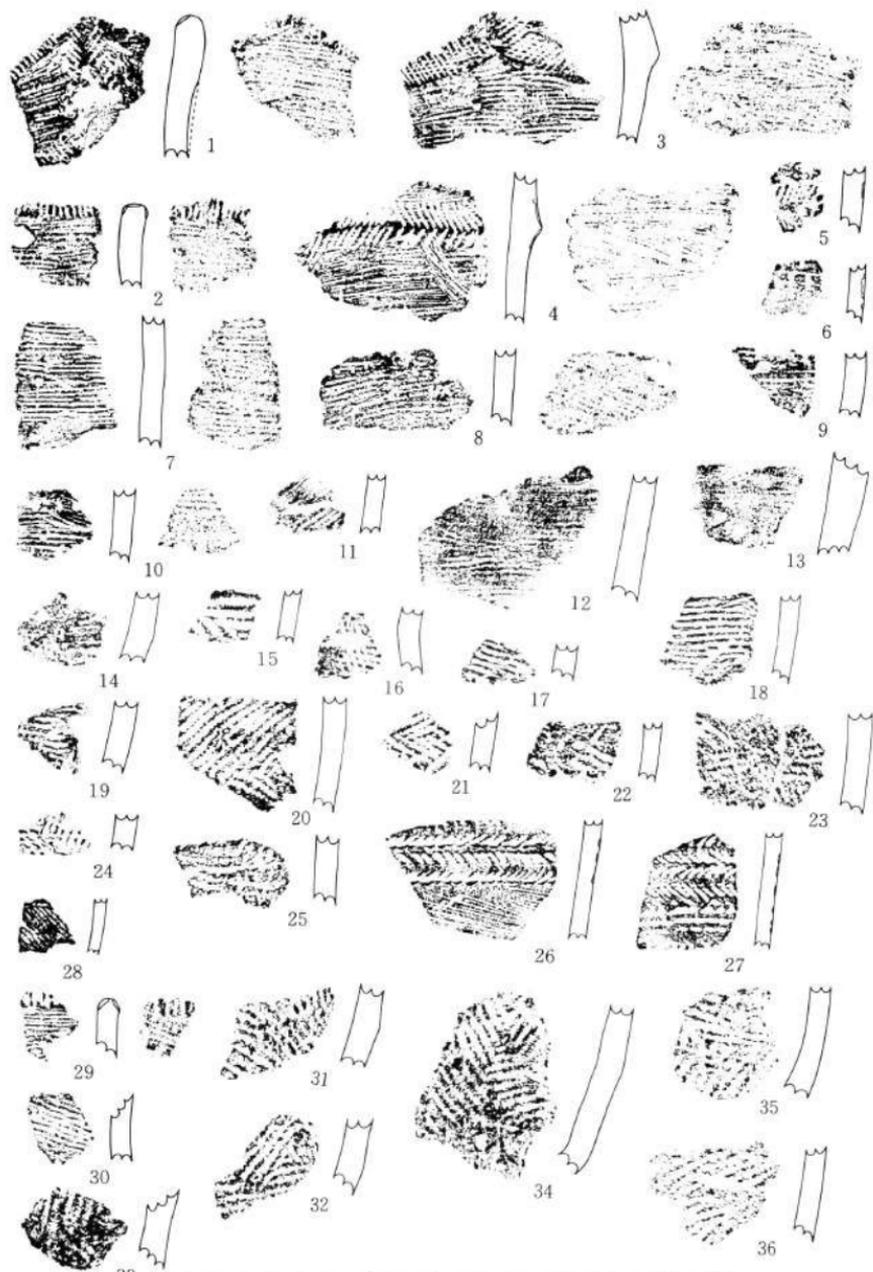


Fig. 48 瓯ノ上A地区出土土器実測図④



33 Fig. 49 堰ノ上B地区出土土器 堰ノ上1号土坑出土土器実測図

☒

版



暖ノ上遺跡A地区全景東側より



暖ノ上遺跡A地区全景



坂ノ上遺跡A地区東側全景



坂ノ上遺跡A地区全景



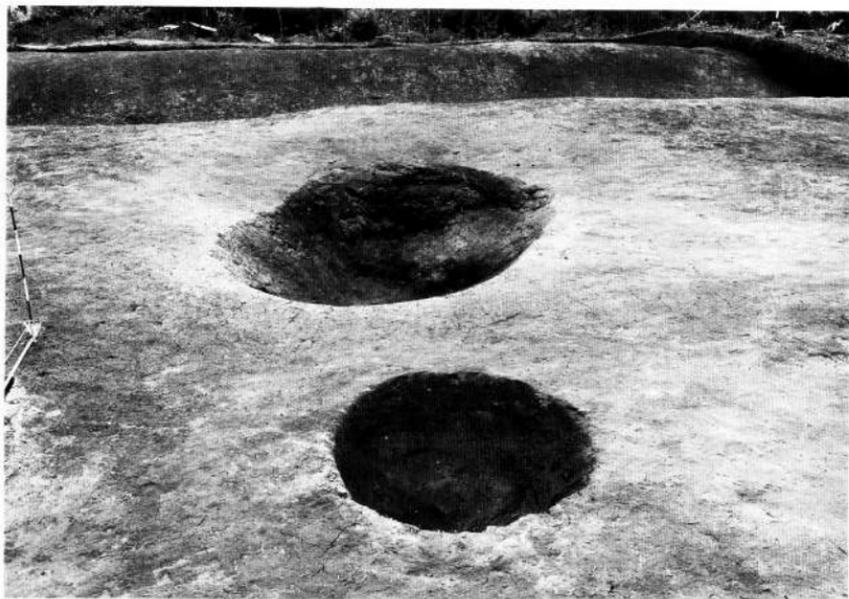
堰ノ上遺跡A地区全景東側より



堰ノ上遺跡A地区全景



堰ノ上遺跡A地区1、2、3号土坑



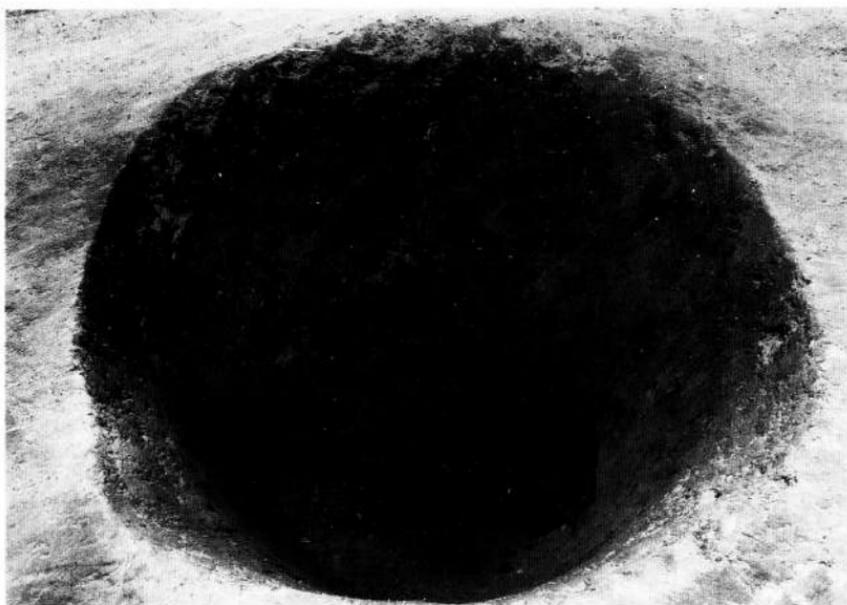
堰ノ上遺跡A地区3・1号土坑



堰ノ上遺跡A地区3号土坑



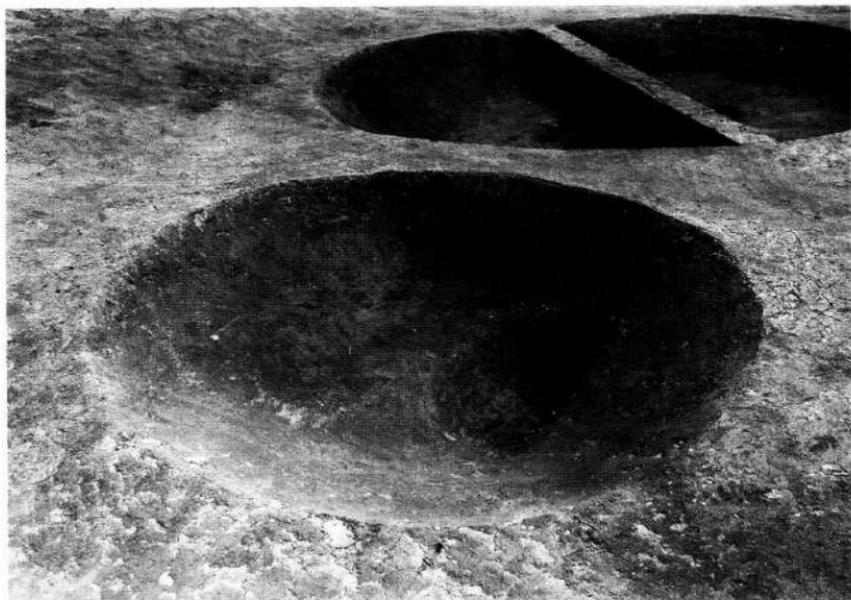
堰ノ上遺跡A地区4号土坑



堰ノ上遺跡A地区 5号土坑



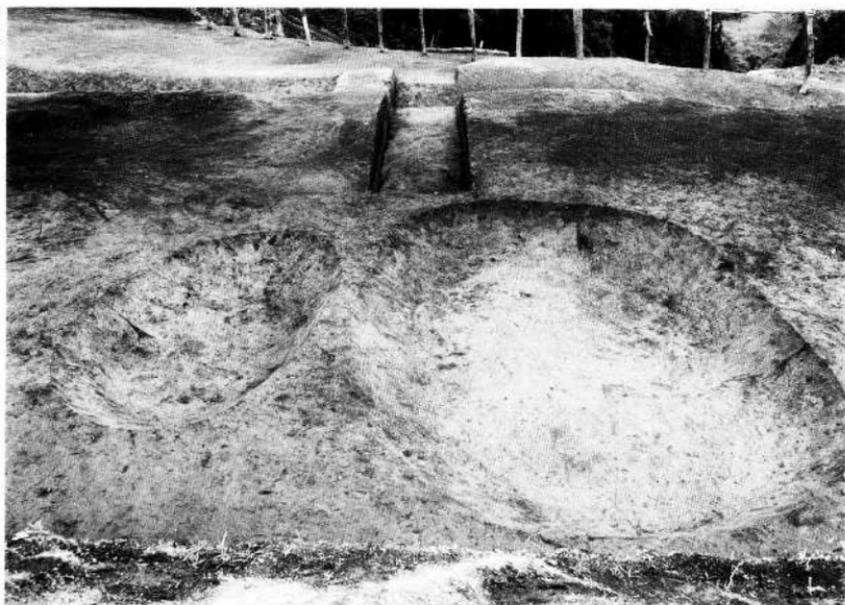
堰ノ上遺跡A地区 6号土坑



堰ノ上遺跡A地区6号土坑



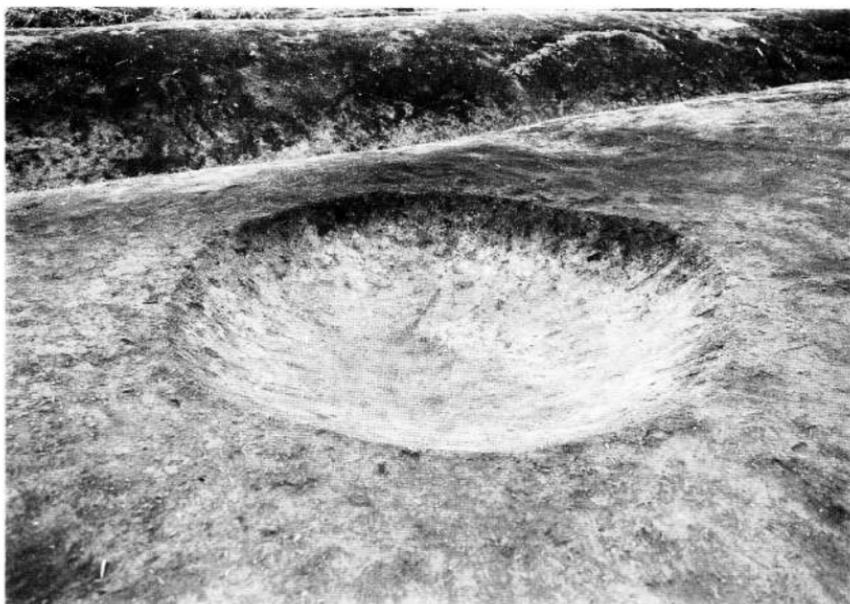
堰ノ上遺跡A地区7号土坑



堀ノ上遺跡A地区8. 9号土坑



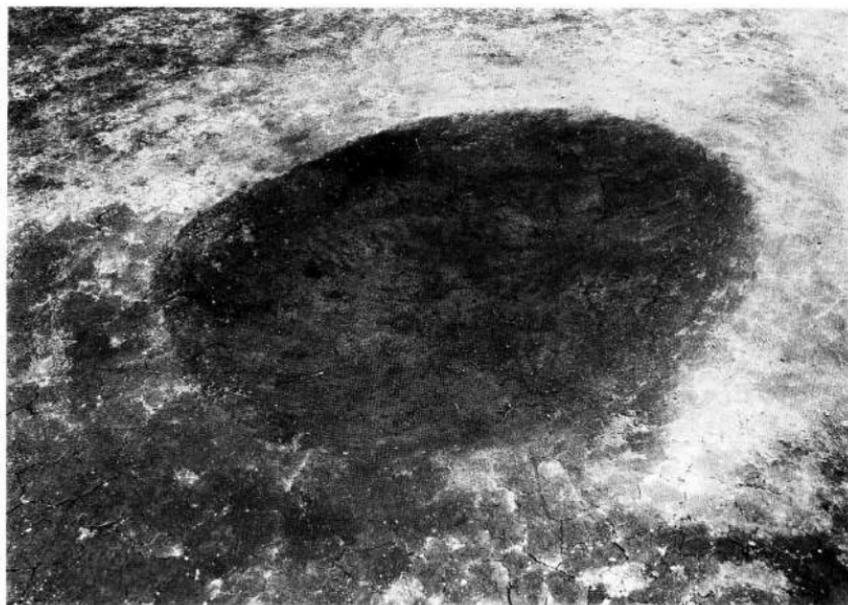
堀ノ上遺跡A地区10号土坑



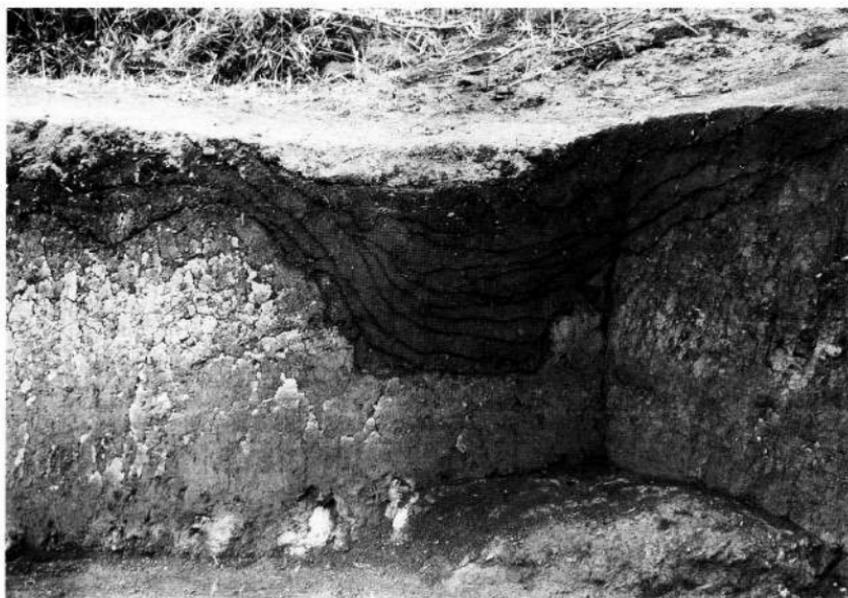
堰ノ上遺跡A地区11号土坑



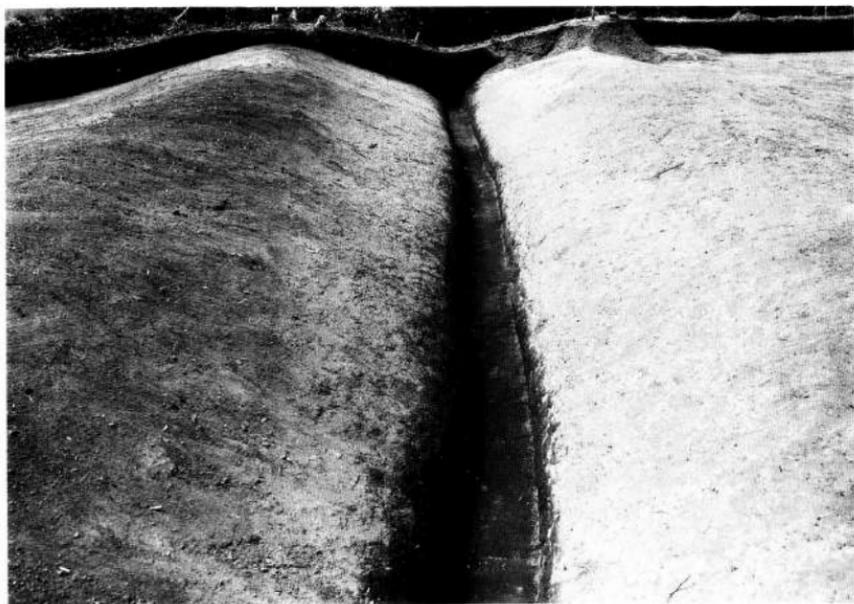
堰ノ上遺跡A地区13号土坑



堰ノ上遺跡A地区16号土坑



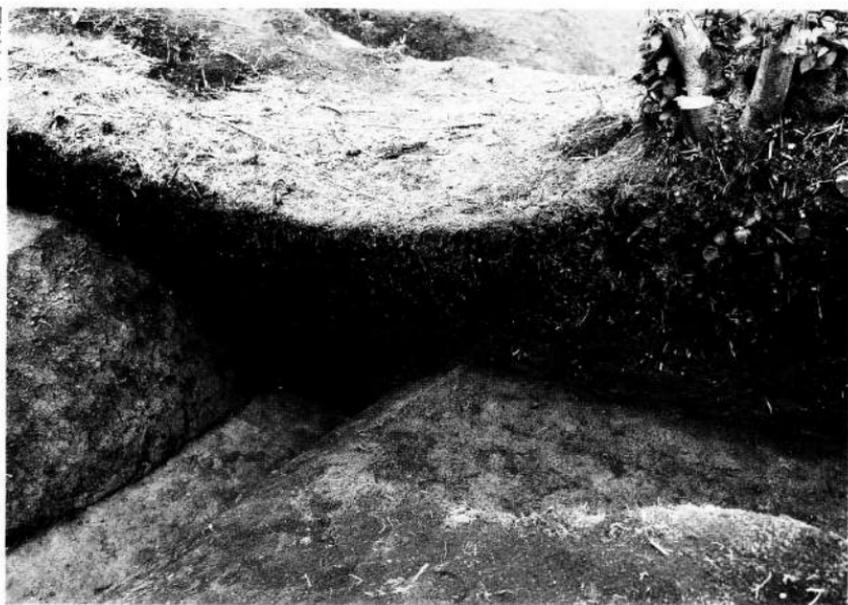
堰ノ上遺跡A地区溝跡断面



堰ノ上遺跡A地区溝跡



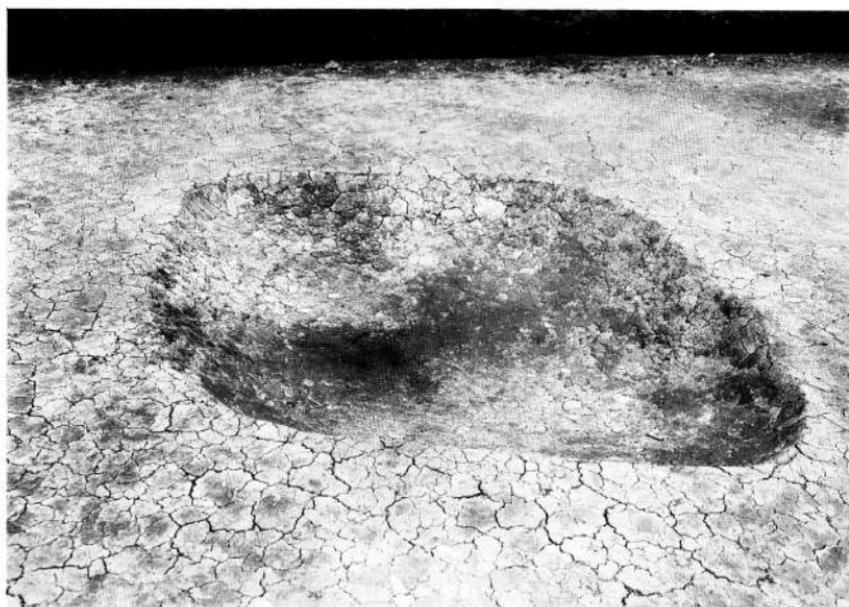
堰ノ上遺跡A地区溝跡中央部断面



堰ノ上遺跡A地区溝跡断面



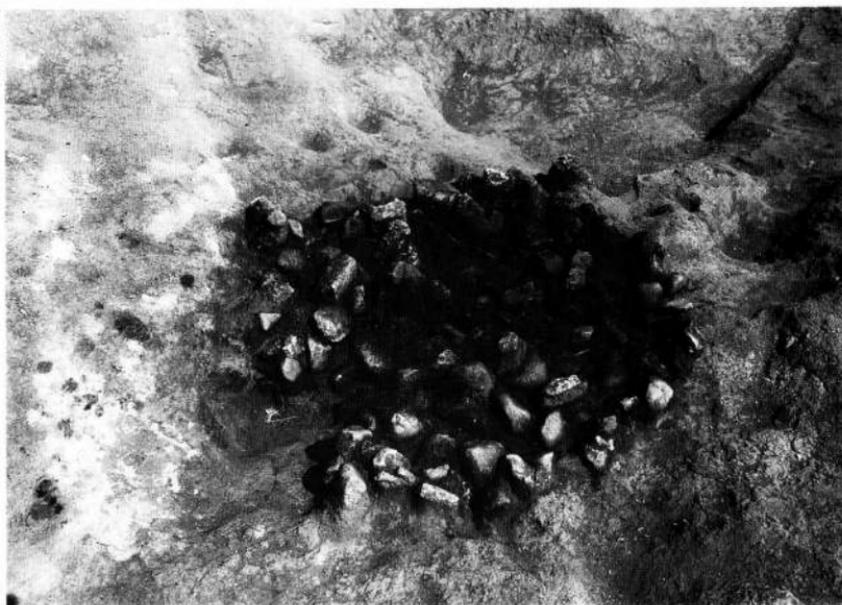
堰ノ上遺跡A地区溝跡断面



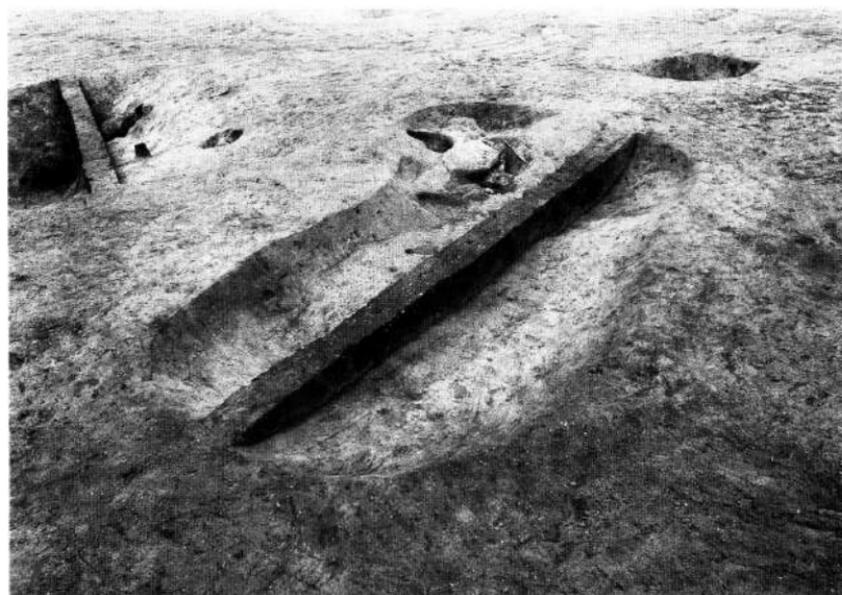
堰ノ上B地区2号土坑



堰ノ上遺跡B地区1号土坑



堰ノ上遺跡B地区1号土坑



堰ノ上遺跡B地区6号土坑（右から）



堰ノ上遺跡B地区8、7号土坑



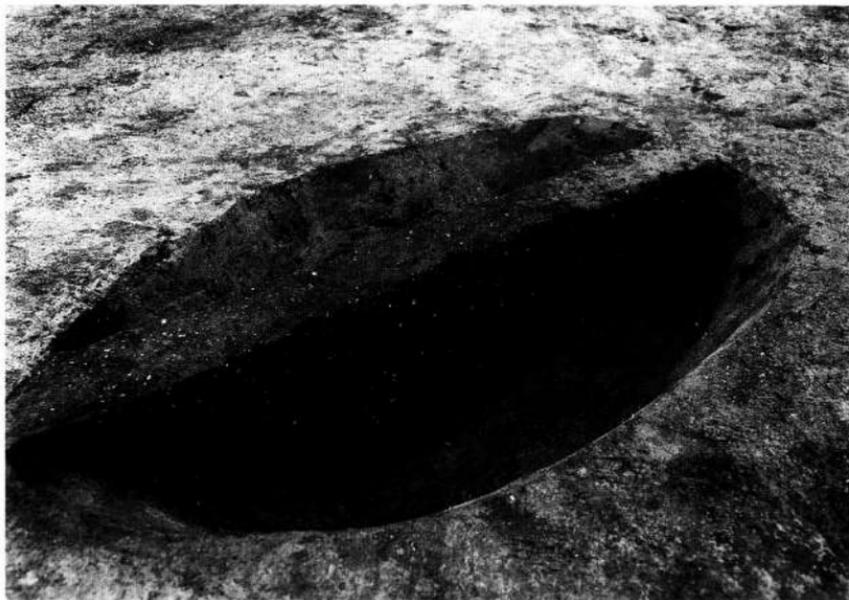
堰ノ上遺跡B地区8号土坑



堰ノ上遺跡B地区9号土坑



堰ノ上遺跡B地区10号土坑



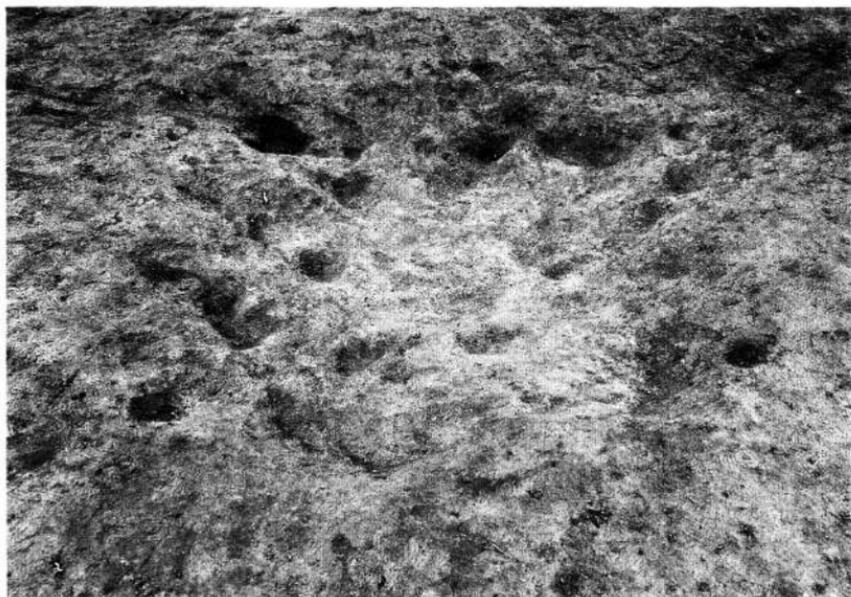
堰ノ上遺跡B地区11号土坑



堰ノ上遺跡B地区12号土坑



堰ノ上遺跡B地区13号土坑



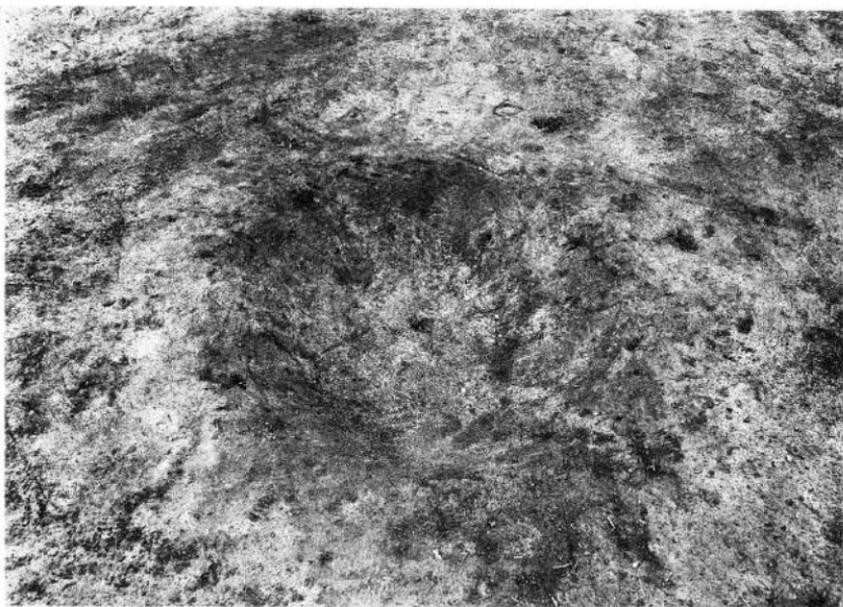
堰ノ上遺跡B地区14号土坑



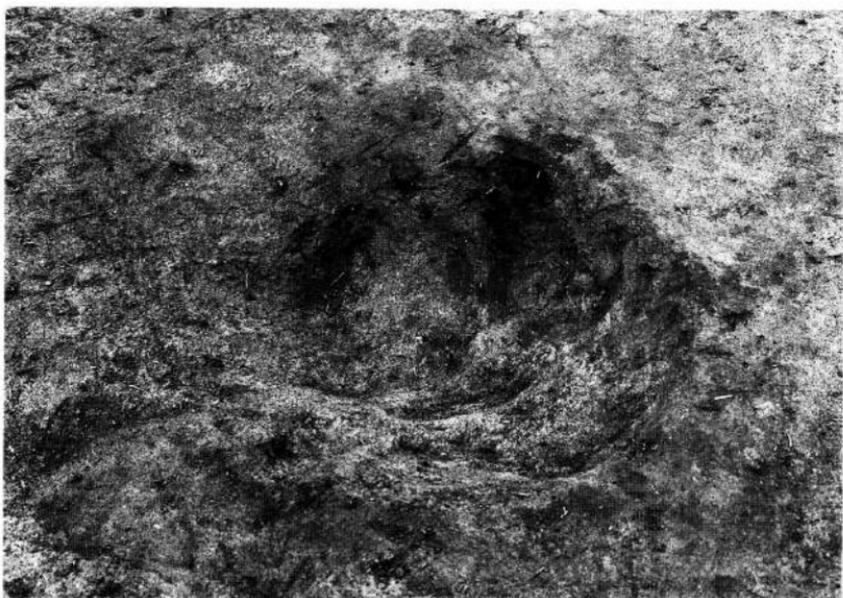
堰ノ上遺跡 B地区15号土坑



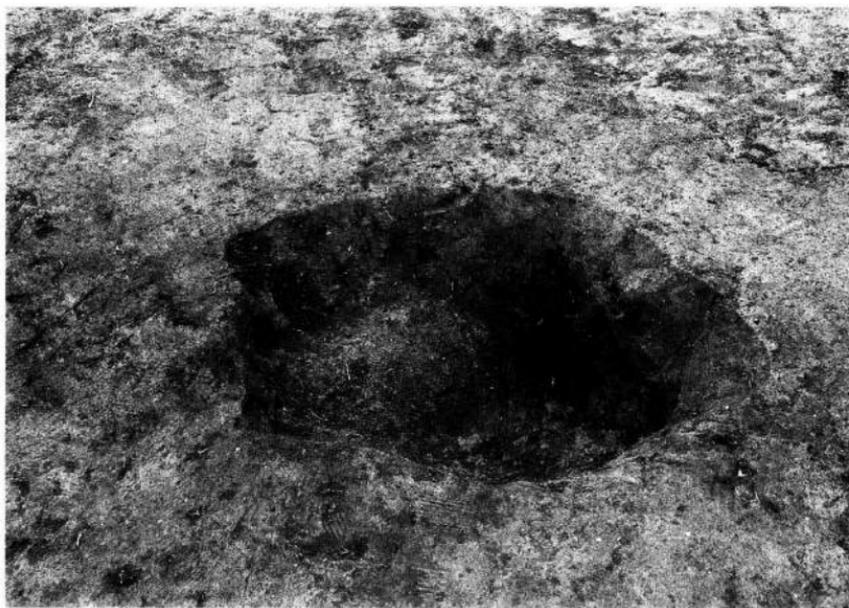
堰ノ上遺跡 B地区17号土坑



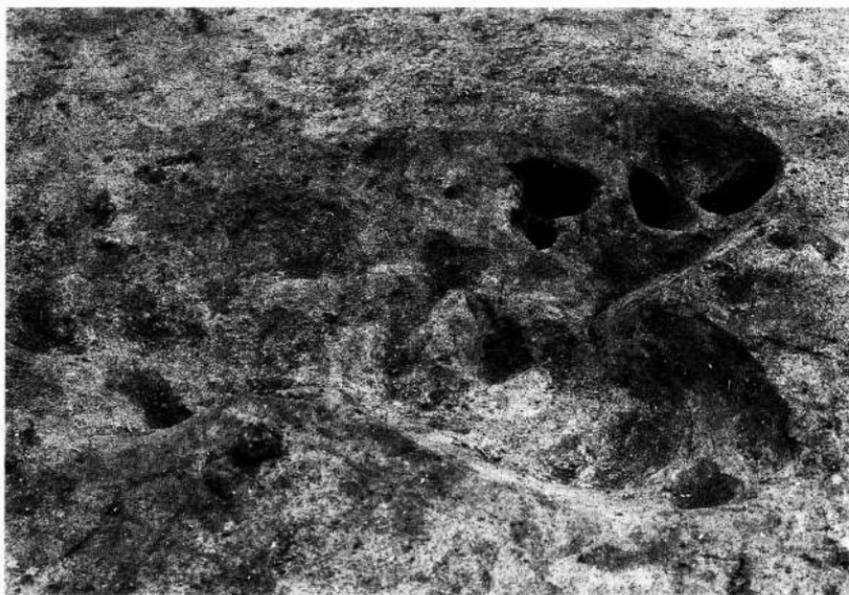
堰ノ上遺跡B地区18号土坑



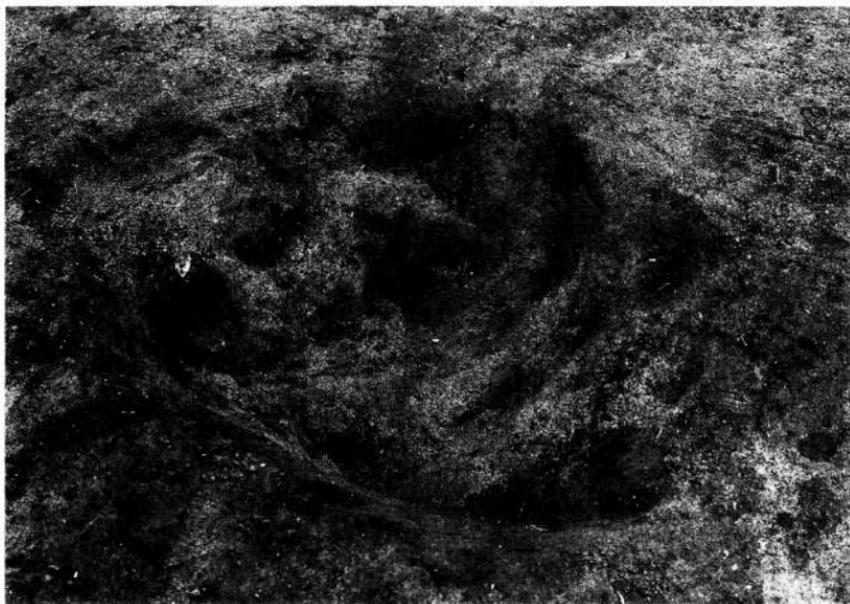
堰ノ上遺跡B地区19号土坑



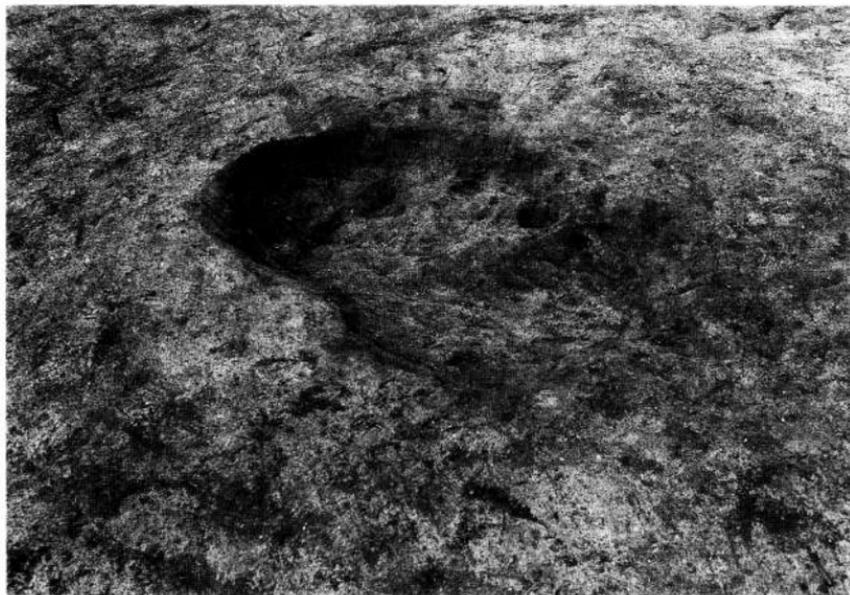
堰ノ上遺跡B地区20号土坑



堰ノ上遺跡B地区21号土坑



堰ノ上遺跡B地区22号土坑



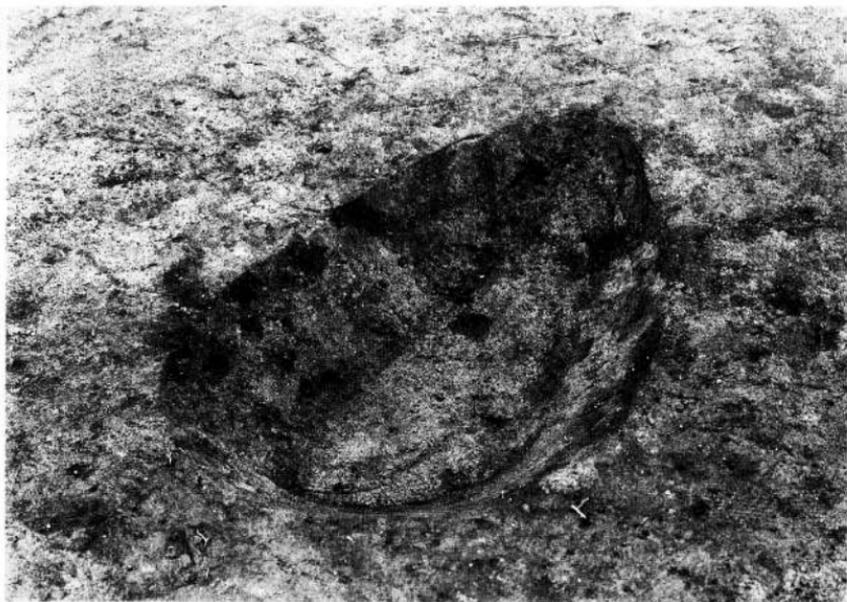
堰ノ上遺跡B地区23号土坑



堰ノ上遺跡B地区24号土坑



堰ノ上遺跡B地区25号土坑



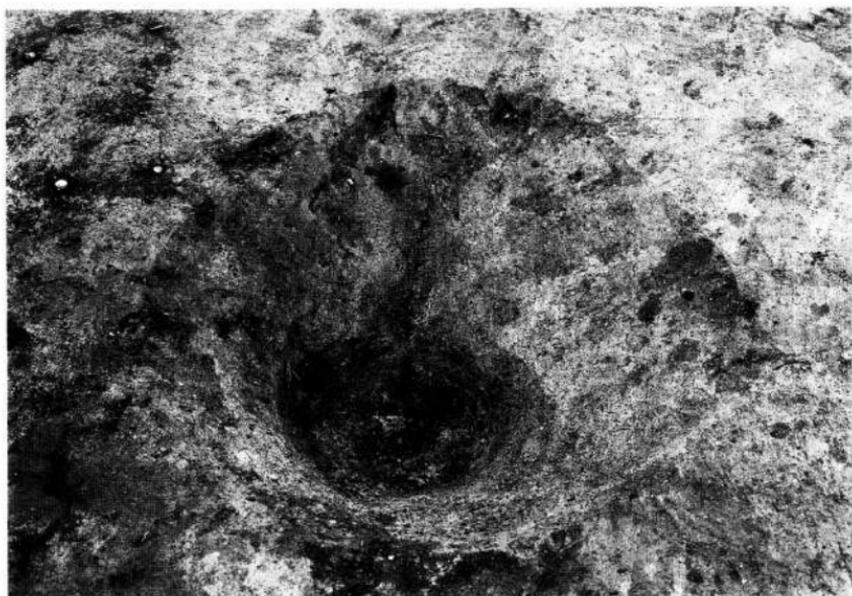
瓶ノ上遺跡B地区27号土坑



瓶ノ上遺跡B地区28号土坑



堰ノ上遺跡B地区28号土坑



堰ノ上遺跡B地区29号土坑



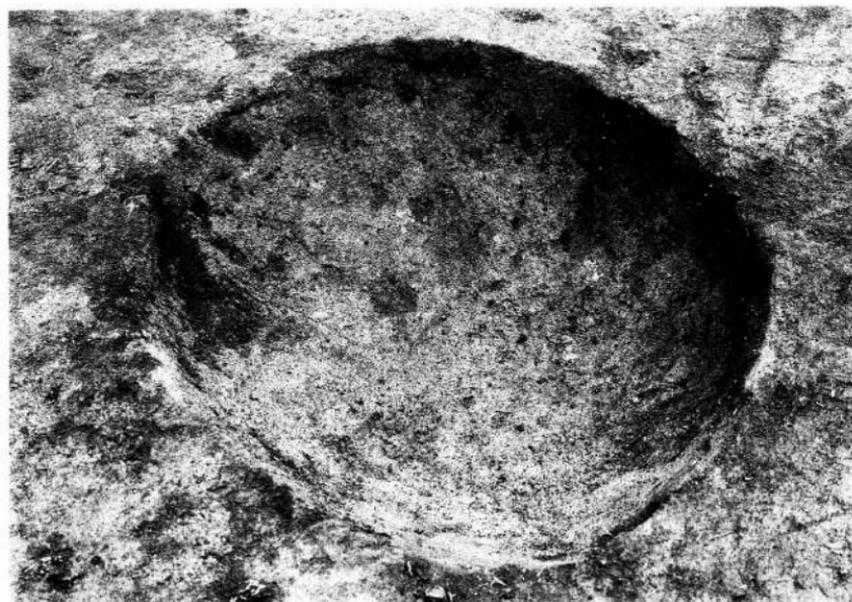
堰ノ上遺跡B地区30号土坑



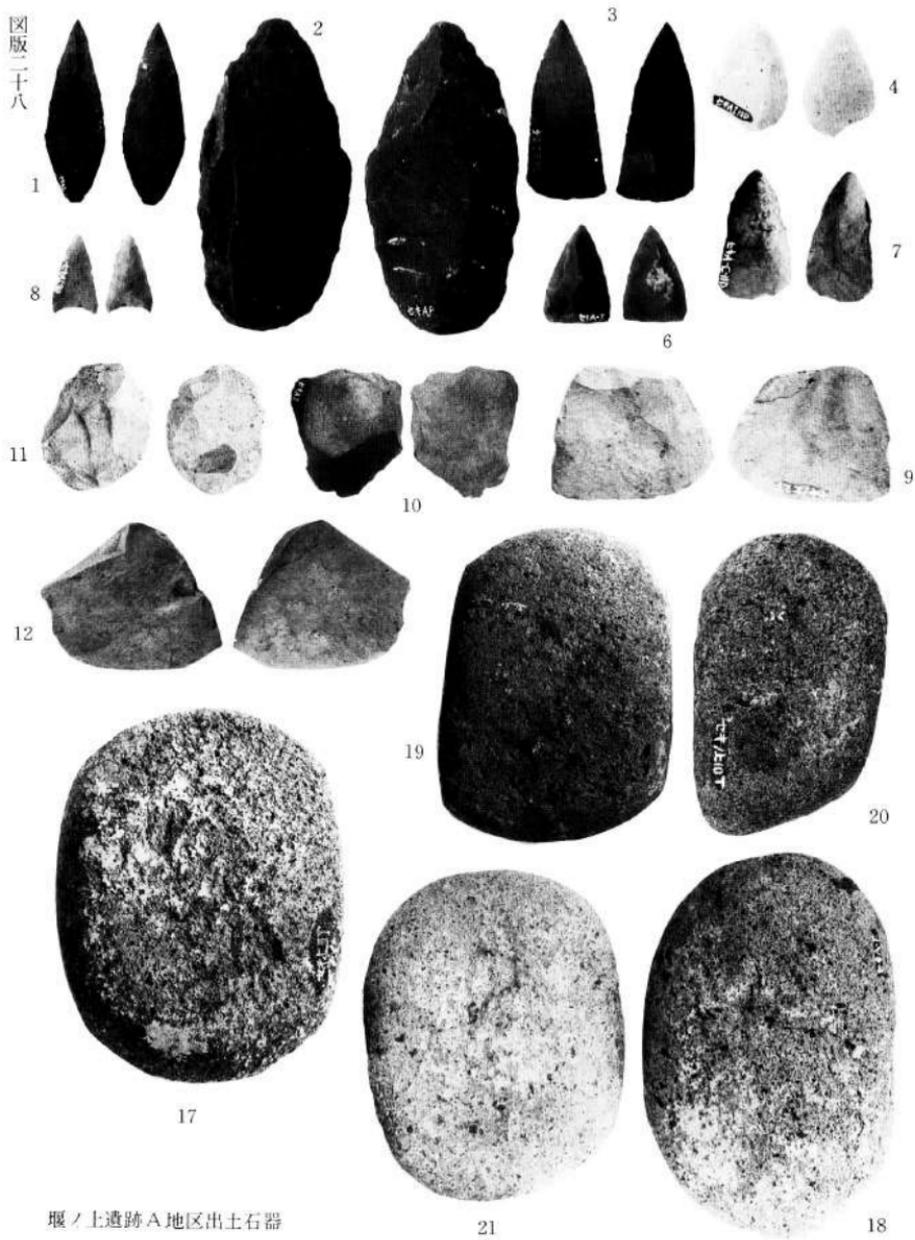
堰ノ上遺跡B地区31号土坑



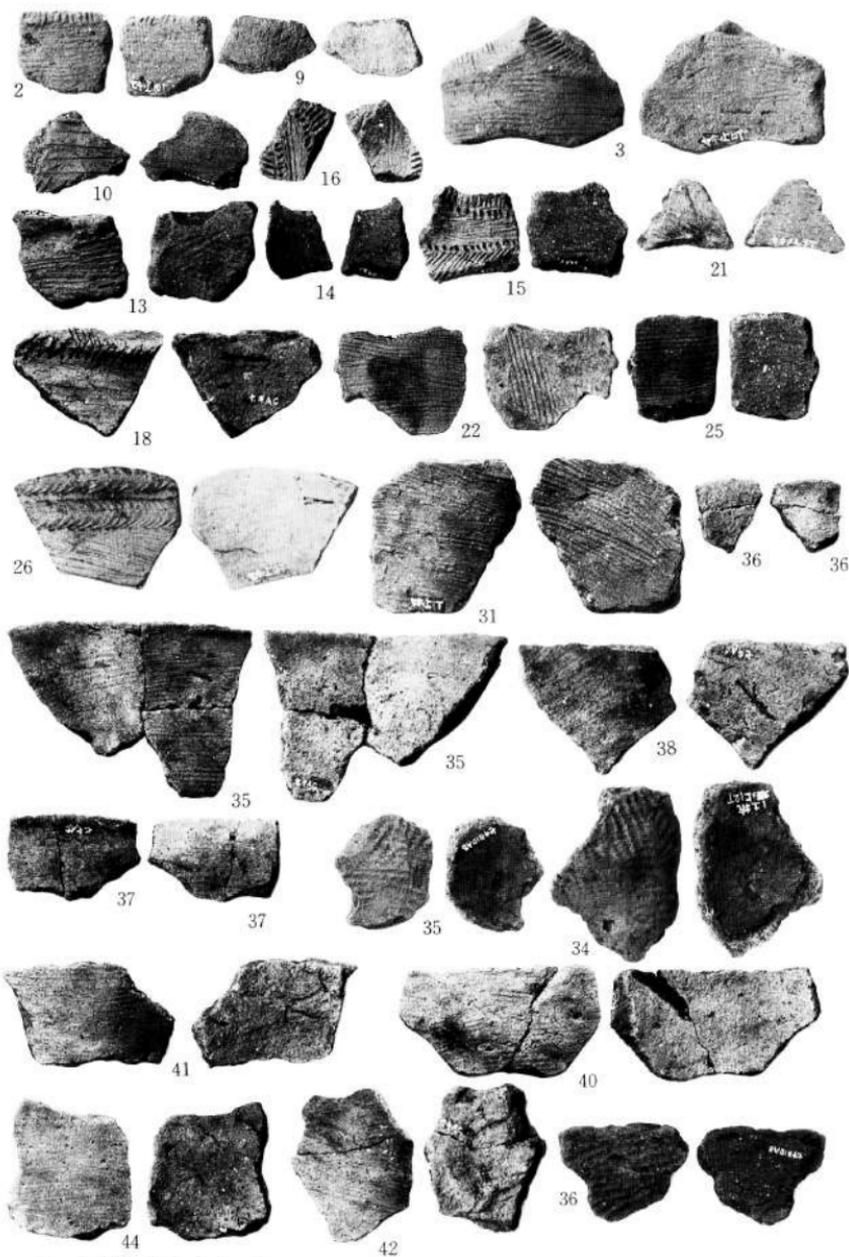
堰ノ上遺跡B地区33号土坑



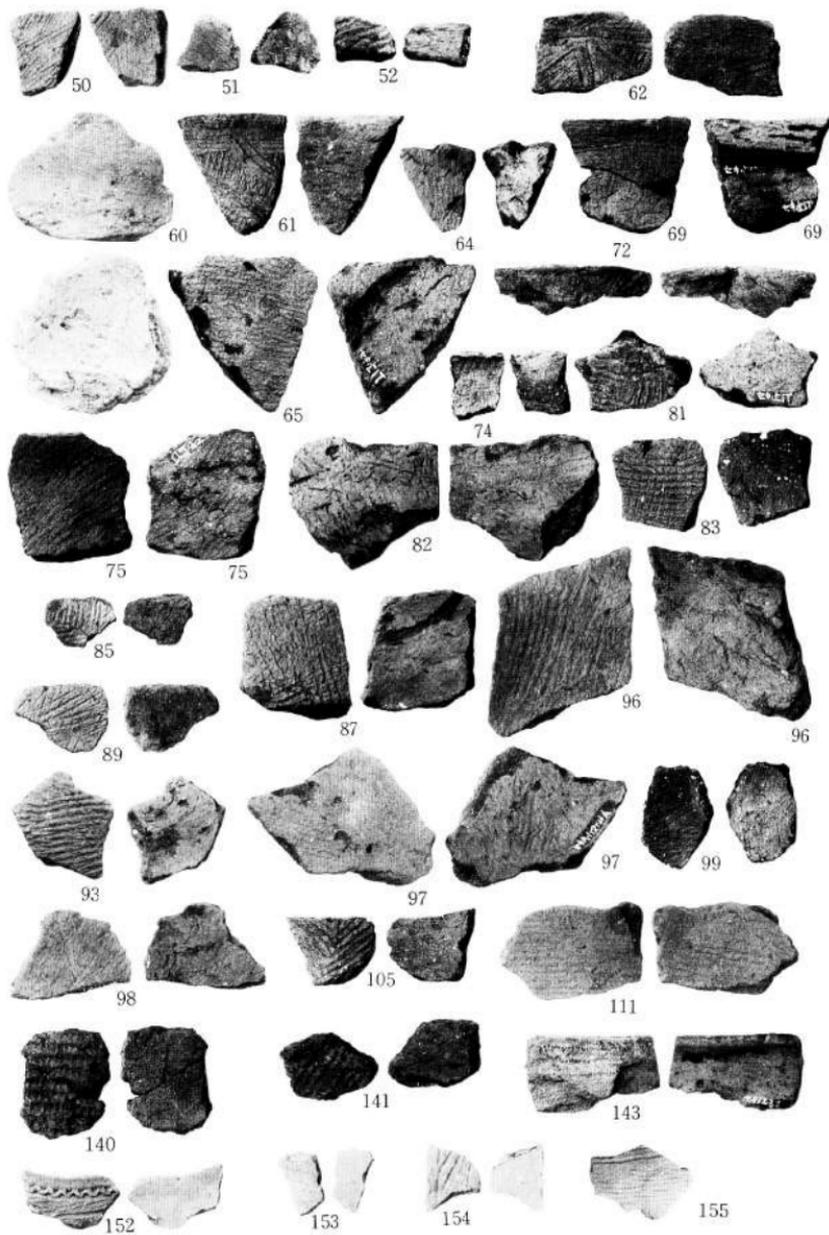
堰ノ上遺跡B地区(上から)12. 33号土坑



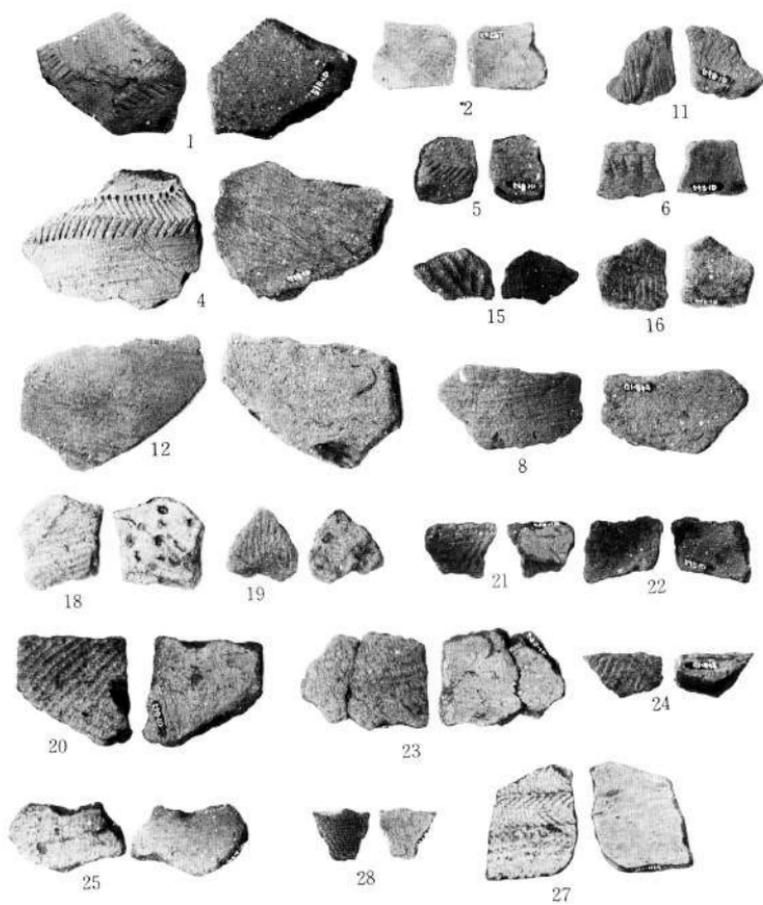
版ノ上遺跡A地区出土石器



堀ノ上遺跡A地区出土土器



壺ノ上遺跡A地区出土土器



堰ノ上B地区出土土器

## 堰の上遺跡発掘調査報告書

平成3年3月20日発行

執筆者 戸田有二、矢島俊雄

編集者 戸田有二

発行 矢吹町教育委員会

印刷 矢吹タイムス印刷